
JETBLACK-Footsteps.Coming.-

凧夏明野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

JETBLACK -Footsteps Coming -

【Zコード】

N1364Z

【作者名】

凧夏明野

【あらすじ】

JETBLACK -P · D · G -に続くJETBLACK第一部
的な体の小説です

人物（前書き）

人物紹介です
隨時更新していきます

人物

S・A II 阿部左宇 水路 11位

本体年齢 20 歳

欺体年齢 17 歳

身長体重共に存在せず

零化 3 回

ナイト 4 回

B U I T e 0 回

咎人討伐数 46 人

同胞討伐数 13 人

魂補充 1016

特性
『最奥の地下水路』
エラヒストス タナトス

左宇の精神は地下水路の様に入り組んでいる。対象をそこに取り込み、心の中の痛手の分相手を殺す。また、相手が何かしらの負い目を感じている時その負い目 × 100 回相手を殺す。ただ殺す度左宇の精神も摩耗していく。取り込まれた対象は基本的に召喚体や呪文を使えないが、それなりに強い奴は使える。空間転移特性の様に使うことも出来、痛手と負い目で殺せなかつた分も殺せるが、新規の相手なら先ず痛手と負い目で殺さなければならぬ。その過程を飛ばしいきなりただ殺すのは不可能。だつたが日々とは是即ち成長促進の為の賜物。進化し、殆ど庭の様に自由に使えるようになつた。これまた有りがちしかし主人公補正とは言わせない主人公がどうか危ういし。水路の広さは S・A 自身も把握出来ておらず、もしかしたら何か住んでるかも。恐ろしい。

“転移動作”水路内を自由に移動できる技？みたいなモノ。これ自身は特性というわけではなく『最奥の地下水路』のオマケ機能みた

いなモノもある。

“突然死”水路はS・Aの精神構造であるのでなんでも自由に出現させられる。死もまた同様として、いきなり空間から剣や刀が現れて対象に突き刺さり殺す。ただこれは防ぐことも可能。最早何を言つているのか分からない。

“空間歪曲”『最奥の地下水路』の構造を変えたり出来る。

使用呪文

ナイト
“千刃の谷”
“ソードフィッシュ”
“T rank app e”
“B LOODY - MARY”
“スレイ・ライ・サントエク”
“ベルンズ・ニー・グリング” 1500 LV16
“グール・ジフ・リートシズク”
“ストップ”
“ワキユレール・ヒルデ・リュブン”
“ダーインスレイヴ”
“サブゴッド・オブ・リメイション”
“ルジエロ”
“デュランダル” 4230 LV18

ONに大城妙の護衛役としてワレラに誘われた。

犯した罪は『親殺し』。

狩ったワレラ不明、生きる動機、また希望共に無しではあったが、罪の中に他人が認める“正義”があつたのでワレラに成れた。

T . O . . = 大城妙 ハンシャ

5位

本体年齢 17歳

欺体年齢 17歳

身長体重共に存在せず

零化45回

ナイト36回

B U I T e 10回

咎人討伐数 955人

同胞討伐数 7人

魂補充 100

特性
『反射>ハンシャくの国』

『強制解除』の時に強制的に使用させられる特性。相手の使う呪文をそのまま反射させる。相手は唱えた呪文が起動しない。

『強制解除』

一週間の内の一日前だけ強制的に零になる。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“ソードフィッシュ”

“スレイ・ライ・サントエク”

“インス・レド・インスティーノウ”

“サブゴッド・オブ・リメイション”

“BLOODY-MARY”

“ストップ”

“煉獄フルガトリウム”

“ドリスト・バリンク・トロック”

“グール・ジフ・リートシズク” 23 L V3

“ベルンズ・ニー・グリング” 17 L V2

“T arnkappe”

“ワキユレール・ヒルデ・リュブン” 18 L V3

“ダーインスレイヴ” 25 L V2

“ルジエロ” 5 L V1

“デュランダル” 127 L V4

B U I T e

“ラムテイル・ヴィーグ”

“イスティーク・ネズダク”

“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ” 5 L V1

“ボスディア・ラ・グロア” 908 L V14

“ブレパス・ア・イカト”

“バルド・トエ・ドル”

“フィンブル・ヴェトルの冬”

犯した罪は『見殺し』。

といつても本人が罪だと見ているだけで他人からすればそれは罪ではないので、贖罪する必要はないと思われる。

が、本人が罪だと考える以上それは罪であり、彼女は咎人になつた。狩つたのは0%。

その後『犯罪者が寄り付く体』を利用し咎人を殺しまくり、ついでに寄ってきた咎人寄りのワレラを7人殺す。

7人目のE・NE、更に1～3人目までは現世で狩つたが、4、5、6人目は“煉獄プルガトリウム”を利用し『曲解の輪廻』の環から外した。

ワレラに成つたのは生きる動機また希望があつたから。

現世の何処かにある“グリモア・グリモワール”を得るというのが動機。

そこにある魔法を使うことが生きる希望。

といつてもこれは後付けの動機と希望で、ワレラに成った時の本来の動機とは若干異なる。

しかし最終的にそれを手に入れることが本来の動機と直結することは言つまでもない。

J・A5=古賀奈保 12位

本体年齢10歳

欺体年齢16歳

身長体重共に存在せず

零化0回

ナイト0回

BUITe0回

咎人討伐数0人

同胞討伐数0人

魂補充0

特性
『守護神』アスピダオス

戦う相手をコピーする。ただしコピーされた守護神は対象を5割強化している。

『忘却』リサイ

特定の記憶を排除させる特性。

『植付』サーグ

『忘却』で消し去った記憶の変わりに違う記憶を植え付ける。

使用呪文

不明

犯した罪無し。

死因は過剰暴力。

ワレラになれたのは〇Ｚの『同情した振り』と『制裁』を目的に持つていたから。

彼女自身はワレラだが、ナイトでもBUITeでもない。

E・NE=シネ

本体年齢不明

欺体年齢25歳

身長体重共に存在せず

零化3回

ナイト4回

BUITe0回

咎人討伐数31人

同胞討伐数18人

魂補充16

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“ソードフィッシュ”

“BLOODY-MARY”

“ストップ”

“ドリスイト・バリング・トロック”

“グール・ジフ・リートシズク”

“ベルンズ・ニー・グリング”

“T a n k a p p e”

“ワキュール・ヒルデ・リュブン”

BUITeを嫌うナイトの一人。

犯した罪は『裏切り』。

殺した同胞18人中18人がBUITeという徹底した嫌BUITe。

騎士の名誉だとか誇りだとか言っているが結局それらも塵の積もつた下らない思想ではある。

D・W/-II 輻醍醐 深部 ○ 2位

本体年齢 853歳

欺体年齢 18歳

身長体重共に存在せず

零化 1192回

ナイト 1193回

BUITe0回

咎人討伐数 11926人

同胞討伐数 11895人

魂補充 13085

特性

『カデュカ深部に至るは全てを知つた』

あらゆるモノの深部に入り込む。空間、時間、次元、人の真意。対象がなんであれ自らを深みに陥れる。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“八龍”

“雷上動” 15000 LV20

“兵破” 15000 LV20

“水破” 15000 LV20

“天の羽々矢” 15000 L V20
“祢々切丸” 15000 L V20
“村雨” 15000 L V20

1159年生まれ。

犯した罪は『配下殺し』。

配下殺しと言つても自分が殺した訳ではなく、自らの力及ばずで殺してしまつた。

他人からすればそれは罪でもなんでもなく、配下からすれば忠義立てした主君に最後まで義を持つて仕えることができたのでむしろ幸せではある。

が、本人が罪だと見ているのでそれは罪であり、自害に依つてワレラと成つた。

P4・D1=太宰・ペルソナ 天才 6位

本体年齢99歳

欺体年齢16歳

身長体重ともに存在せず

零化5000回

ナイト46回

BUI Te4955回

咎人討伐数500000人

同胞討伐数0人

魂補充4879

特性
『ブクレット』
『古書』

全ての事象、この世の理は遙か太古に記された書に全て収められている。『古書』はそれを呼び出し、相手の特性や魂補充、召喚体の

細かいレベルを読み取る。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“ソードフィッシュ”

“スレイ・ライ・サントエク”

“ストップ”

“インス・レド・インスティーノウ”

“グール・ジフ・リートシズク”

273

“ベルンズ・ニー・グリング”

“T a n k a p p e”

“サブゴッド・オブ・リメイション”

“オウブ・ゼス・エピック”

“ドリスイト・バリング・トロック”

“B L O O D Y - M A R Y”

“ワキユレール・ヒルデ・リュブン”

“ダーインスレイヴ”

“ハ龍”

“雷上動”

“兵破”

“水破”

“天の羽々矢”

“赤い石”

“祢々切丸”

“煉獄プルガトリウム”

“ルジエロ”

“7つの大罪”

“デュランダル”

B U I T e

L V 8

“ラムティル・ヴィーグ”	“イスティーク・ネスダク”	“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ”	“450
“ボスディア・ラ・グロアデイ”	“ブレバス・ア・イカト”	“バルド・トエ・ドル”	“
“痛過儀礼”	“鬼人面相”	“ストップ”	“
“蜘蛛縄”	“蝕虫毒”	“	“
“A z i Dhaka”	“400	“L V10	“L V10
“Abaddon”	“400	“L V10	“
“ワイルド・ハント”	“	“	“
“ワインブルヴェトルの冬”	“	“	“
“サブナク・ソロモン”	“400	“L V10	“
“ツマグ・オグンジエニ・ヴク”	“400	“L V10	“
“エクシユキユ”	“400	“L V10	“
“フラガラッハ”	“15000	“L V20	“
“エクスタルタロ”	“	“	“
“ベレト・ソロモン”	“14000	“L V18	“
“シャックス・ソロモン”	“6587	“L V18	“
“キマリス・ソロモン”	“15074	“L V19	“

犯した罪は『悪魔契約』。

ワレラの呪文の中には悪魔召喚のモノもあるがそれはそれ、人間に
内に悪魔契約など大罪でしかない。

ある意味での咎人であるワレラには許される。
そしてそれが、彼がワレラになつた理由もある。

明確な動機は全知全能になること。

どんな詰まらない些細なことも全てを知りたい。

E2・D1＝太宰秀一　秀才

25位

本体年齢99歳

欺体年齢16歳

身長体重共に存在せず

零化0回

ナイト0回

BUITe1回

咎人討伐数0人

同胞討伐数5000人

魂補充4974

特性

『支えの空』
エモニ ウラノス

彼は常にそれだけを求める。前に立つのではなく、隣に肩を並べるのではなく、背後に控えるのではない。ただ支えることで自らを、支えるに値する者を強化する。

使用呪文

BUITe

“ラムテイル・ヴィーグ”
“イスティーク・ネスダク”
“スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ” 480 LV10
“ボスディア・ラ・グロアディ” 15000 LV20
“ブレパス・ア・イカト”
“バルド・トエ・ドル”
“鬼人面相”
“痛過儀礼”

特性	“ストップ”
“蜘蛛繩”	“蝕虫毒”
“A z i D h a k a” 5 8 0	“Abaddon” 4 9 8 L V 1 0
“ワイルド・ハント”	“”
“”	“”
“”	“”
“”	“”
“”	“”
“”	“”
“サブナク・ソロモン” 5 9 0	“ツマグ・オグンジエニ・ヴク” 4 8 0 L V 1 0
“エクシユキュ” 5 0 0	“”
L V 1 0	L V 1 0

犯した罪は『兄弟殺し』と『自殺』。

悪魔契約に失敗したペルソナを助けるため自殺。

自殺による罪で咎人になり、それをワレラの誰かが浄化し、兄を助けるという動機でワレラに成了た。

そして『悪魔契約』を行つた兄を咎人として殺し、ペルソナもまた全知全能になるという動機の下ワレラに成了た。

Ve · I E = ヴュール 不快 × 1位

本体年齢不明

欺体年齢20歳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充無数

二十面体の賽子の召喚体を召喚する。

通常の六面体賽子は全ての面が出る確率一定だが、『確率破綻の国』の場合1／20の確率ではなく、振る度に確率変動を起こす。初期確率は7、13、20が0。

4、15、18が1／18。

9が9／18。

11が8／18。

6が6／18。

2、3、5、10、16、17が4／18。

1、8、12、14、19が2／18である。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

B U I T e

“イステーク・ネスダク”

史上最悪のワレラ。

犯した罪は間接的な『大量殺戮』。

十殺せば殺人者百殺せば殺人鬼百万殺せば英雄を地で行つた男。

この世に『曲解した輪廻』を齎している『全てを束縛する国』を保つていてる存在もある。

そのため〇二やト・〇・・は彼を殺すことを善しとしない。

E。 X = 出宮真 真理 × 13位

年齢 17歳
身長 165.2cm
体重 54.5kg
零化 0回

ナイト〇回

B U I T e 〇回

咎人討伐数〇人

同胞討伐数〇人

魂補充〇

特性
『ハコニワ
真理の国』

彷徨う彼方で出宮が使用した『“S c e n i c P r o j e c t i o n” 風景投影』が特性として顕現した形。

使用呪文

ナイト

見たもの全て

B U I T e

見たもの全て

『彷徨う彼方』のラスボス。

『戦う理由』にも出ている。

どこにでも出てくる困ったちゃん。

彼のアダム『D u s t』により、見た呪文聞いた呪文、特性全てを使用可能にする。

A · A O = 吾桑 快感

21位

本体年齢 27 歳

欺体年齢 20 歳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

ナイト〇回

特性	B U I T e 不明 咎人討伐数不明 同胞討伐数不明 魂補充不明
『快乐主義者』の空	この世で誰かが感じた快乐全てを集め溜めておき、対象に必要な分だけぶつける。
使用呪文	対象の快乐の蓋が開いた時、快感に溺れ溺死する。
不明	Ve . I E に叩き込まれた不快に『快乐主義者』の空 全てが飲まれ死んでいった。
	犯した罪は『違法薬剤投与』。

d I n / = ルチアーノ 絶望 × 20位

本体年齢 35歳
欺体年齢 35歳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性

『アベルビスィア タラサ
望みを絶つ海』

先に99の希望を『え、 1の絶望を『え』ことより100の絶望に変える。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“ソードフィッシュ”

“スレイ・ライ・サントエク”

“ストップ”

“インス・レド・インスティーノウ”

“グール・ジフ・リートシズク”

“ベルンズ・ニー・グリング”

“T a n k a p p e”

B U I T e

“ラムティル・ヴィーグ”

“イステーク・ネスダク”

“ボスティア・ラ・グロアディ”

“ブレパス・ア・イカト”

犯した罪は『拷問殺人』。

崖に掘まる友人を殺した事が『望みを絶つ海』を開花させた様な気がする。

伍堂の女 愛^{さねる}

30位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明	ナイト不明
BUITe不明	咎人討伐数不明
咎人討伐数3747	同胞討伐数不明
魂補充3747	魂補充3747
特性	特性
『 ^{トウット} アモーレ 他者の愛』	死んだ魂を束縛し拠り所に連れていくことでワレラとする。
最大100人。	ワレラにするに際し伍堂の女の魂が1消費されるが、E・0としワレラになつた者が狩つた魂は伍堂の女のモノになる。更にE・0は、伍堂の女が存命ならば死んだとして魂の消費なく循環する。
使用呪文	
不明	
D・G0=裁断介添人 助力 ○ 26位	犯した罪は『旦那殺し』。
本体年齢不明	
欺体年齢65歳	
身長体重共に存在せず	
零化不明	
ナイト不明	
BUITe不明	
咎人討伐数不明	
同胞討伐数不明	

魂補充不明

特性

『ワニールス ベツルス
眞偽は我の前に明快』

ワレラの特殊技能である『犯罪の透視』で見た罪を、言葉にすることにより人間にも理解、納得させる特性。

『ユーティキウム
裁断介添人』

復讐を遂げたいと思っている人間に一時的にワレラとしての能力、『隕の見掛け』や『犯罪の透視』、また“千刃の谷”と“ボスディア・ラ・グロアディ”を詠唱拒否で使用可能にする。これにより人間が復讐を遂げた場合D・G0に魂補充が10追加され、咎人討伐数は100増えていく。

使用呪文

不明

科された罪は『殺人』。

自らは罪と認めず、擦り付けられた罪でワレラになった唯一の人間。本来ならば自らの罪で、自らが罪と信じなければワレラにはなれないが、0%の計らいでワレラになった。

本当は、ワレラになり自分に罪を擦り付けた奴を殺すはずだったのだが、ワレラとして現世に戻ってきた時、すでにそいつは死んでいた。

復讐を遂げられなかつたD・G0は、顯現した特性により他人の復讐を助けることにより自らの欲を満たしていった。

DIE=ダイオレス 殺人鬼 × 8位
本体年齢 154歳

欺体年齢 15 歳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充 7 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

特性

『殺意の咆哮響く国』
ヤクトル ザイール バラド

空間転移特性。偽装空間とも言える。仮想生活圏で国。そこには数十万人間が住んでおり、この国に送り込まれた対象に全員の殺意が集中する。そしてあらゆる手段で対象を殺しに掛かる。無論DIEも殺しに来る。この国の住人は全てDIEが以前殺した人達。

使用呪文

存在し得る呪文全て

ワレラになる前、つまり生きていた頃一万人以上を殺した究極なる殺人鬼。“者”ではなく“鬼”。二つ名の通り、綺麗な殺しではなく数の殺しを好む。10歳の頃同級を殺してから一日も欠かさず誰かを殺している辺り、実はV e · I E以上に不快感を感じさせ、この世の狂人全てを集めた狂氣より狂っているのかもしれない。犯した罪は『大量殺人』

I I I I I サナイ 無限

15 位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUITe不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『無限の廻廊続く国』

詳細不明

使用呪文

不明

未確認。

SION=シオン 爆破

○

14位

本体年齢不明
欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUITe不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『火となり灰となれ』

特性
『火とティア・スタッフ』

人以外、全てを爆破させられる。基本的に見た物は爆破か着火。触れた物は時間差爆破、若しくは即時灰化出来る。

使用呪文

ナイト

“千刃の谷”

“ソードフィッシュ”

“グール・ジフ・リー・トシズク”

“ベルンズ・ニー・グリング”

“サブゴッド・オブ・リメイション”

BUITe

“イステーク・ネスダク”

“ボスディア・ラ・グロアディ”

犯した罪は『世界の主要建築物連続爆破』。といつてもそれらの建築物は世界にとって不要、癌のような存在であった。人の欲と業により構成されたそれを爆破し続けたのはむしろ正義だということでのワレラになれた。

C A b T II	兜 暗殺者	× 18位
本体年齢	不明	
欺体年齢	不明	
身長	体重共に存在せず	
零化	不明	
ナイト	不明	
BUITe	不明	
咎人討伐	数	不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『スコタディ』
暗闇の空
『ウラノス』

同胞討伐数不明

魂補充不明

使用呪文
不明

N i n g = 中田 溺死

17位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『バゴ』

『凍える寒さの水面に落ちる』
リムニ
ブトスイ

空間転移特性。偽装空間とも言える。半径5kmの湖の上に対象を連れていく。

使用呪文
不明

Deet デイート 殺人者 × 9位

本体年齢 123歳

欺体年齢不詳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUITe 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『ソガアロ インテルフィチツク
纖細なる殺意の国』

空間転移特性。偽装空間とも言える。仮想生活圏で国。この国に入国した者は片腕が吹き飛んでいようが、片脚が切断されていようが、片眼が割り貫かれていようが、どんな“外傷”を負つていようがたちまち回復する。この特性を使うには条件がある。半径1km以内に外傷を負つた者がいること。Deet自体もこの空間に行けば外傷は全て治る。ただDeet以外に怪我人がいなければ使えない。そして『纖細なる殺意の国』の最大の特徴は、一度入るとDeetを殺そうがなんだろうが一時間は出られないことだ。そしてワレラは、T.O.の『強制解除』の様に正にも負にもなれず零のままその国を彷徨うことになる。

使用呪文

不明

生前、“治す”ことこそこの世で至高の行いであると信じ、医者になり多くの人を無償で救ってきた。ワレラとなつた今も諸外国の貧困街や貧しい村に行き無償で治療などを行つてゐる。が、根本的な部分が生前と死後では違つてゐた。生前は純粹に治すこと、修復が

好きだと思っていた。事実治すことだけに生涯を費やした。そして生きていた最後の日によつやく気づいた。治すこと自体が好きなのではない。それは過程に過ぎず、重要なことはその後に待つているのだということに。『・・・』なら完全な状態でなければ意味はない。そして彼は『解体殺人“仮”』を犯し、ワレラに依り浄化された。殺した人数に対し救済した人数が圧倒的多数であつたためワレラになつた。

THUN=サン 雷 16位

本体年齢不明
欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUILTe不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『原点の雷』
プロエレスフガラヴァノス

使用呪文

不明

未確認。

X a n a 佐奈 桃源郷

0 位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『バラディソス
桃源郷』

空間転移特性。偽装空間とも言える。この世の楽園『桃源郷』に行く。ここにはなにもなく、なにもかもを召喚出来る。痛みも苦しみもなく、X a n aはワレラになつてからずつとこの空間に引きこもつてゐる。

使用呪文

不明

引きこもり。

D · G O / = 裁断請負人

28位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明
咎人討伐数不明
同胞討伐数不明
魂補充不明

特性
『裁断請負人』

D I E / K II 殺人請負人

×

27位

使用呪文

本体年齢不明
欺体年齢不明
身長体重共に存在せず
零化不明
ナイト不明
B U I T e 不明
咎人討伐数不明
同胞討伐数不明
魂補充不明

特性
『殺人請負人』

使用呪文

Edi a II 自殺介添人 × 29位

本体年齢不明
欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUI T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『自殺介添人』

使用呪文

d0S II デイオス

殲滅

○ 10位

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

BUI T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明
魂補充 7 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

特性
『殲滅帝国』
アベルビネダリウム

ディオス自身が現世に50体出現する。

使用呪文

不明

ある国^の元元帥。犯した罪は、恐らく『e・IEより酷い『国滅ぼし』。ある国に反発していたとある小国を、『国』と文字通り“滅ぼした”。ただ、それはある国にとつても世界にとつても、プラスになることはあれマイナスにはりえない事象であった。しかし、一国を、そして大量の人間を殺したことにはなりのバッシングを受け、全ての責任を負いディオスは自害した。そして死後、その行為に正義があり、敬意を表されたためワレラになつた。殺しに正義を求める一般人を殺すことはない。

EU/＝レンゴウ　自由　　19位

本体年齢不明
欺体年齢不明
身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性

『選択するは個人の自由』

使用呪文

h / S . = 椎名サンザ 透明

本体年齢不明

欺体年齢不明

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性
『ソマ 存在値は光の屈折オス』

透明になれる。

使用呪文

不明

未確認。

d O G C II 選択者

×

7位

0位

本体年齢不明
欺体年齢不明
身長体重共に存在せず
零化不明

ナイト不明

B U I T e 不明

咎人討伐数不明

同胞討伐数不明

魂補充不明

特性

『神の意志などないに等しい。取捨はまた容易く』

全ての事象に対し等しく“選択”する権利を得る。ただし“Y e s”か“N o”で答えられることに限り、直接“殺すか否か”的選択は出来ない。間接的な殺しの選択、例えば“崖から突き落とすか否か”Y e s O R N o、という選択は可能。Y e sを選択すれば対象は崖から落ち、N oを選択すれば対象は崖から落ちることはない。この選択は絶対的な死に直結しないので選択出来る。

使用呪文

脇役大全

A O F II ガブス

本体年齢 27 歳

欺体年齢 38 歳

身長体重共に存在せず

零化不明

ナイト 0 回

B U I T e 3574 回

咎人討伐数 35740 人

同胞討伐数 49 人

魂補充 2130

特性

『劣悪盗撮奇行』

他人が起こした一つの動作を丸々コピー出来る。“例えば100m走る”者がいたとして、『劣悪盗撮奇行』を使った場合、AOF自身が動かなくても同じ様に同じスピードで100m移動できる。ただこの特性の特筆すべきことは、コピー出来る対象の最外存在位置が100km先までということである。100km圏内で起きた動作ならば選択しコピー出来るのだ。これを使って敵の位置を探つたりする、AOFは「コピーより寧ろこちらを有意義に使つていいようだ。

使用呪文

BUITe

“ ラムティル・ヴィーグ ”		
“ イステーク・ネスダク ”		
“ スロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ ”	18245	L V19
“ ボスディア・ラ・グロアディ ”	19528	L V20
“ ブレパス・ア・イカト ”		
“ バルド・トエ・ドル ”		
“ 痛過儀礼 ”		
“ 鬼人面相 ”		
“ ストップ ”		
“ 蝕虫毒 ”		
“ 蜘蛛縄 ”		
“ ワイルド・ハント ”		
“ フインブルヴェトルの冬 ”		
“ サブナク・ソロモン ”		
“ ツマグ・オグンジエニ・ヴク ”		

L V13

“エクシユキユ”
“エクスタルタロ”

ガシフェロ・ボンバカルテルの用心棒。

その強さはランキングに入っていてもおかしくないくらい。

S・AはAOFと戦いAOFを敗走させはしたが、まともにやり合えばほぼ間違いなく勝つのはAOF。

『劣悪盜撮奇行』なんて変な名前の特性つけてすみません。犯した罪とかは不明つてことで。

BAKA!! ガシフェロ・ボンバ

本体年齢 57歳

欺体年齢 28歳

身長体重共に存在せず

零化不明（知りたくもない）

ナイト不明

BUTe不明（知りたくもない）

咎人討伐数不明（知りたくもない）

同胞討伐数不明（知りたくもない）

魂補充 573

特性

『ファトウウス メディカーメン』
抜け穴の埋まつた横道』

『快楽主義者の空』の劣化版。与える快楽は、自分に還元されるものでしかないので、あまり拘束力がない。自分より強い者は酒に酔

つた程度にしか落とせない。

呪文

知りたくもない

ガシフェロ・ボンバカルテルの総帥？社長？的な野郎。
人が麻薬で落ちていく姿を見るのがこの世で至高の興趣だと思つて
いる馬鹿。

最終的どころか、面から実益主義で、自らを楽しませぬことしかし
ないので特性の力もカス。
死んでほしい。

ナイト 呪文（前書き）

ナイトの呪文です
更新するかも

ナイト 呪文

『星。抽象概念の具体概念。至上の感情高次の生命。火と月、エーテルの狼。頌歌の流れる地と天。滴る純金。宿り場の精靈。現状の限界からの解放。血の生命を我に手向ける。“Astral”』火と月からなる高レベルの世界アストラルを召喚、考え方によつてはそこに移動する呪文。ただの人間を連れていった場合子供に。咎人を連れていけば無条件でワレラになる。此処で殺された場合人間は死なず、咎人は天国へ、ワレラは永遠にアストラル内を彷徨う。これを使った術者は魂補充を100個消費する。

『ラジエルの書。根本原理降靈の文書。心身破滅天使魔術。真実在の影。ソロモンの小さな鍵レメゲトン。パウロの書アルマデル。現世後世次元の魔術を責方へ。“グリモア・グリモワール”ナイトが覚えるであろう全ての魔術が書かれた書。

グリモワールはフランス語。グリモアは英語読み表記か。15世紀末～18世紀にかけての魔術にかかるさまざまな文書をあらわす名称。

“突き詰めるのは正義の殺人
目には目を、歯には歯を、殺しには殺しを
殺されたいからお前は殺す
罰とは言わない
制裁であり死刑
我は成す我を成す
墮落の騎士の下に誓いを
私は殲滅します”

主に剣や刀などを使うクラス

Create 剣と唱えれば剣が、Create 刀と唱えれば刀が、Create 銃と唱えれば銃がそれぞれ『えられる

『来い流星群。貫き、拘束しろ。『千刃の谷』』
ナイトが最初から使える呪文。剣の雨を降らせる。

『降り注げ切り裂く風よ。『ソードフィッシュ』』
刃を風にし吹きすさばせる

『燐燐煌煌突き刺す光』『スレイ・ライ・サントエク』
物理化した太陽光線が対象を突き刺し殺す

『一の雨、十の雪、百の風、千の死。世界に散らばる全ての狂氣を
貴方に。『インス・レド・インスティーノウ』』
一でこの世で最も軽い罰を、十でこの世で最も軽い痛みを、百でこの世で最も重い罰を、千で死に落とす。

『隠れ蓑。受け取る返り血。竜の魂。不死の騎士。終局にて墮落。
二ベルングの指環』『グール・ジフ・リートシズク』』
二ベルンゲンの歌の主人公であるジークフリートを召喚させる。

『殺す。殺す殺す。正義の下に殺戮。騎士の名誉に於て殺戮。
殺戮の下に殺戮。魂の蒸発。体の昇華。死の頌歌。集え裏切り指輪
は点す。『ベルンズ・ニー・グリング』』

ジークフリートの剣グラムを出現させる。その名は古ノルド語で怒りを意味する。オーディンからシグムンドへ『えられ、後に息子のシグルズに受け継がれた。石や鉄も容易く切り裂いたといわれている。鍛え直された後の長さは7スパン（およそ140センチメートル）あつた

『隠れ外套。クペランの騙し討ち。二ーベルンゲンの歌。霧の帽子“Tarnkappe”（タルンカッペ）』ジーフリートが手に入れたかくれマントを召喚する呪文。姿を消すことができる。

『輝け魂。昇華に繼ぐ昇華。神聖の下に更なる誓いを。“サブゴッド・オブ・リメイション”』

ナイトの力を倍増させる。普段より速く、普段より滑らかに動き、華麗に、鋭く対象を殺す。

『高潔なる血。純正なる血。無垢なる血。精巧なる体。たい磊落なる心。らいらく大悟なる志。呼び起こせ古代太古最古の魂。“オウブ・ゼス・エピツク”』

ゼウスの剣であるケルキオンを召喚させる。雷を司る剣で、一振りで街を、一振りで国を滅ぼそうと思えばそれが出来る。ただ他の武器や召喚体にも言えることだが現世においてその威力を發揮するのは難しい。真価を見たいのであれば“アストラル”や“煉獄ブルガトリウム”などの偽装空間に行くしかない。現世で本気を出した場合は小島が破壊できる程度。

『世界の沈黙。沈黙は金。金は権力。権力は世界。全ては黙り屈服す。“ドリスト・バリンク・トロック”』

対象の動きを封じる呪文。

『好みは流血。迫害の姫。反感する精神。天に召します最後の血。

“BLOODY-MARY”』切り傷を付けることでそこから血を噴き出させる。

『静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負は動作。“

『ストップ』

指定範囲内の動きをなくす。人間は動けないが、ワレラは動くことができる。

『戦乙女。戦死者を選ぶ女。バルハラの運び手——ベルンゲンの歌。』

“ワキュレール・ヒルデ・リュブン”『

ワルキューレの一人ブリュンヒルデを召喚する。

『ダーラインの遺産。生き血を。魔剣の真価。熔かし吸い尽くす。“ダーラインスレイヴ”』

魔剣ダーラインスレイヴを召喚させる。一度鞘から抜いてしまつと、生き血を浴びて完全に吸うまで鞘に納まらないといわれた魔剣の代表格。ブリュンヒルデに持たせることにより威力を發揮する。

『しほき唐綾からじやをもてをどしたる大荒おおあら日あの鎧。同じく獅子の金物打たるまに。“八龍”』

ハツ首の龍の魂が宿つた鎧。破損しても即座に修復される。

『眠りを醒ます』。雷の鋭さ夢の朧。“雷上動”『

日本の伝説にててくる神がかり的な矢。これにより放たれた矢は雷の速さ、威力を誇るが、夢の様に朧げにもなる。

『兵共つわものも夢の後。“兵破”』

日本の伝説にててくる神がかり的な矢。一撃で100人の兵を殺す。

『明鏡止水しなやかなる生命。“水破”』

日本の伝説にててくる神がかり的な矢。一撃放てば、周囲は水を打つたように静まり返る。

『正体の証明。証の神。天にも昇る魂。“天の羽々矢”』

櫛玉饒速田の命が天の神の子である証拠として、長髓彦が天皇にみせた品。

『金属の母。哲学の真実。墓場凝固発酵増殖。賢者のために捧げる。

“赤い石”』

賢者の石を召喚する。召喚者の望むモノを3つだけ具現化出来る。

『山は金。波を起こし波瀾とす。断ち切る大太刀“祢々切丸”』
全長3.4m、刃長2.2m、重量22.5kgの大太刀を召喚する。山を斬れば道が出来、海を斬れば津波を起こす。

『中途の地獄。贖罪の地。ある意味での報いある意味での封印。逃げ出す術は無く許されない。“煉獄ブルガトリウム”』

ブルガトリウムを出現、考えようによつてはそこに移動する呪文。大罪を犯した者は地獄に、それ以外の者は天国に落とす。此処で淨化された咎人はワレラに成れず、また魂の補充があるワレラもまた輪廻の環から外される。一度に消せる魂補充は世界人口に比例する。この世界では大体70億。

『狂えるオルランド。岩縛りの女。アルノルト。オーギュスト。“ルジエロ”』

イタリアの物語の勇士ルジエロを召喚する。岩にしばりつけられた女性を助けるため、竜の首を切り落として倒した。

『Seven sins。傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、
欲情。ライオン、蛇、ゴニコーン、熊、狐、豚、蠍。十戒、十惡、
五逆罪。当然の報いを此処に。“7つの大罪”』

キリスト教の伝承、神学上の教義。七つの大罪は凄まじいデーモン、
悪魔の姿であらわされることもある。

傲慢

『ライオン』

憤怒 [ラース] 嫉妬 [イ-ンガイ-]

〔 蟻 〕

「狐」

「狐」

欲情 暴食 強欲 怠惰 憤怒 嫉妬
ラスト ブラスト グラード グリード サラウス ラース
「サソリ」 「豚」 「狐」 「熊」 「ゴーラーク」 「蛇」

『サン・ピエールの歯。サン・パジールの血。司教サン・ドーの髪。サント・マリアの衣の布端。12勇士の魂。自傷の剣、されど壊れず眠りに就く。『デュランダル』』

フランスのシャルルマーニュ伝説、また「ロランの歌」にでてくる武器テュランダルを召喚する呪文。シャルルマーニュの12勇士の一人、ロランの持つ名剣。名匠の鍛えた業物であり、強靭かつ鋭い切れ味で、どんな防具もひとたまりもないという。黄金の柄の中に聖遺物（サン・ピエールの歯、サン・パジールの血、パリ最初の司教サン・ドニの髪、サント・マリアの衣の布端など）が収められている。

『地獄出身。無音の蹄。不沈の蹄。羽無しの翼。雲の海、沈没の魂。

“ベエヤード”

シャーレマン伝説にてヘルベニアードを召喚する呪文。石をけつても音をたてず、水の上を歩いても沈まず、翼がなくとも空を飛び、雲の上まで飛べるといふ。

『黄金の柄。勝利を呼び込み殺害。血吸いの剣。深紅に染まり鞘が

“テュルフィング”
収める。

北欧の伝承に出てくる剣テュルフィングを召喚する呪文。柄は黄金、切れ味は鉄も服と同じようにやすやす切り、決して錆びつかず、持ち主が誰であれ勝利をもたらす。半ば強制的に造らせたこの剣は、鞘から抜かれると人間の血に染まらなければ鞘におさまらなかつた。

切り付けられたものはその日のうちに死んだという。

『神の門。ジッグラト・ヒ・テメン・アン・キ。天と地の基礎の家。7層に連なる階。シナルの地、落下する煉瓦。名声向上周囲集中。混乱に崩壊。辿り着くことは一度と無く乱れ。眞実のその向こう。

“バベルの塔”』

ユダヤ神話の旧約聖書・創世記に出てくるバベルの塔を召喚考えようによつてはそこに移動する呪文。この塔の建設には40年以上かかり、頂上まで登るのに1年かかったと言う。頂上に着くまで実際は1時間、体感時間は1年かかる40の階で構成されており、1つ階を進む毎に大事な事を忘れていく、思い出すことは一度とない。

『抜けば玉散る氷の刃。“村雨”』

『南総里見八犬伝』に登場する架空の刀村雨を召喚する。鞘から抜くと刀身に露が浮かぶ奇瑞がある。切り付けた部分が凍りつく。

『神族の腕は銀であり剣。四種の神器フインジアスより来たる。眼前に残党無し。煌煌の剣“クラウ・ソナス”』

ケルト神話に登場するダーナ神族の王、銀の腕ヌアザの所有する剣クラウ・ソナスを召喚する。鞘から出れば周りの者の目を眩ます。相手は抵抗する事すら出来ずに一分される不敗の剣であると伝えられる。不可視の敵だろうが見つけだし殺す。

『エノク第三書。炎翼の天使、智の天使。神流の栄光であり光輝。

7つの天国すら灰燼と化す。“ケルビナー・シェキエル”』

智天使ケルビムの長ケルビエルが携えているというシェキナーの弓を召喚する。太陽の36万5000倍明るいという。弓だけでも相当な威力を發揮するが、これによつて放たれた矢は、たとえ紙で作られた矢としても鉄筋コンクリートの5階建てビルを一撃で粉碎する。

『神に似た者。七大天使の一人。罪悪の天秤、秤の担い手。光彩の篝火。元始の人々との邂逅。さあ起原に戻ろう。』『ミカエル・ヨハネ』

ユダヤ教、キリスト教における天使ミカエルを召喚する。名前は「神に似た者」の意。大天使であり、剣と、最後の審判で人間の罪をはかる天秤をもつ。ルシファーと戦った天使であり、ヨハネ黙示録ではドラゴンを退治する物語があるせいか、描かれる時も鎧をまい、剣を持った姿が多い。人間との関わりが深く、アダムとイヴを天使たちに紹介したり、アダムたちに穀物の種を渡すなどしている。

BUITe 呪文（前書き）

BUITeの呪文です
更新するかも

“ 醜惡な心を剥き出す

目には目を、歯には歯を、殺しには殺しを

食い散らかし消化

食い散らかし淨化

食い散らかし昇華

魂の権限を私に

崇高なる獸の下に誓いを

私は救済します”

『全ての人は肉塊に。全ての物は塵芥に。来いよ死の部屋。 “ ラム
ティル・ヴィーグ ”』

指定範囲に内側に重力負荷がかかるドームを作る。中の重力負荷は
大体1000G

『暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い暗い。地に
伏せ、叩き込まれる杭。幾百の杭で喰いちぎる。 “ イステーク・ネ
スダク ”』

初撃が右手、二撃目が左手を撃ち、三撃目が左脚を、四撃目が右脚
を貫き大地に磔にする。更に杭が体中に降り注ぎ、最終的に心臓を
喰らわれる。

『冥界の番犬。構成するは双頭の犬地獄の犬。魂を導く死の咆哮。
速く速く速くしないと持つていかれる。底無し穴の靈。来たれ “ ス
ロトル・オロスケル・ハウンドヘルベ ”』

冥界の番犬であるケルベロスを呼び出す。真ん中がヘルハウンド、

左右の顔がオルトロスで構成されている。ヘルハウンド、オルトロス双方の特性に加え、ケルベロス本来の力も備えている地獄と冥界の番犬。

『常世の闇をここぐ。常夜に。巢くわせ蓄え喰らい尽くす。悪魔の剣。死を運び生とす。“ボスティア・ラ・グロアディ”』
悪魔の剣を召喚。血を吸うほど切れ味を増し、生物を殺す程強度を増す。

『>死者の書く。魂の経過に興味は湧く。導く死の魂と旅路。解脱し、生きていけ。“バルド・トエ・ドル”』
触れた相手を安樂死させる呪文。

『寒い。辛い。極限の痛み。崩壊する自我。そして達する。墮ちていけ。“痛過儀礼”』
対象は一歩歩く度に寒さが体を貫き、体が凍るような痛みに苛まれる。

『鬼哭啾啾。電光朝露。鬼の慟哭。泣いたとして変化無し。命短し殺せよ乙女。“鬼人面相”』

BUITeの力を倍増させる。普段より速く、普段より滑らかに動き、華麗に、鋭く対象を殺す。

『静止。制止。止まり動かない。零は無力。正は動作負は動作。“ストップ”』

指定範囲内の動きをなくす。人間は動けないが、ワレラは動くことができる。

『つむぐ者。頭を擡げるを良しとせず。ニグリスの泉。瞳の中は死者の国。“ブレパス・ア・イカト”』

眼を見た者を死に追いやるカトブレバスの瞳を自分の瞳に召喚する。

右目は石化、左目は死を司る。

『鳥の鳴き声。黒猫の横断。夜の口笛。瞳を暗く喉は潰れ蝕む頭。

“蝕虫毒”』

対象の指定部位を腐らせる。

『絡む糸。混じる紐。手繰れば縄。救いを求め掴む命。しかし断ち切る。“蜘蛛縄”』

精神攻撃。大穴に吊され、下からは炎が噴き出す幻影を見せる。体を支えているのはたつた一本の糸のみ。

『欠乏と貧困。飢えと渴き。老年と死。悲しみと嘆き。極署と極寒。悪魔と人間の混淆。地上の王座、三首三口六眼の龍。“Azazel”（アゼ・ダハーカ）』

ゾロアスター教の伝承における怪物アゼ・ダハーカを召喚する。悪神アンラ・マンゴの率いる魔物のひとつで、三頭・三口・六眼の竜だという。世界の終わりには人類の3分の1を殺戮することを運命づけられているといふ。

『彼を殺した彼を殺す。破壊者アポリオン。第七階級の魔神の長。ボルヘスの地獄辞典。殺戮の天使。底なしの穴に巢くう王。到達しがたい場所。到らず墮とす。“Abaddon”（アバドン）』

默示録の殺戮の天使、底なしの穴に住むデーモンの王であるアバドンを召喚する。

『Hans von Hackelberg-Hans von

Hackelberg』先導の梟。嵐の通過。獵の名手獵の名犬。食らい尽くせ“ワイルド・ハント”』

ヨーロッパの伝承で、獵犬と獵師からなる幽霊の群れ。幽体で人に

対する物理的干渉は出来ないが、鼻がよく利き敵を探し出したりする。

『**大いなる冬。** ファインブルテュール f.i.m.b.u.l.t.y.r. 殺害とシヴィヤスリト。ギュルヴィの惑わし第五十一章。煤赤色のとさかの雄鶏の鳴き声。諸神の戦いの神々の大いなる運命。世界に終わりが。『 ファインブルヴェトルの冬。』』

古い太陽が光を失うとこの冬がきて、雪があらゆる方向から吹きつけ、霜は厳しく、風は身を切るようにきつい。これが三度続き、その間夏はないといふ。この冬の空間ファインブルヴェトルの冬を召喚、考えようによつてはそこに移動する呪文。

『**与え癒す。** 腐敗の傷に蛆。青白馬の騎手。猶予の30、72の一角。『サブナク・ソロモン。』』

ソロモンの72の悪魔の一人サブナクを召喚する。ライオンの頭をもつ獰猛な戦士の姿で、青白い馬に乗つて現れる。軍事力と築城術の知識を持つてゐるため召喚されるといふ。また癒しがたい負傷を与える、またはあらゆる負傷を癒すともいふ。

『**狼憑きの領主。** z m a g o g o n n . j e n n i v u k. 運命の殺し。

『**ツマグ・オグンジヒ・ヴク。』』**

ボスニア、セルビアの伝承の怪物、ドラゴン殺しの英雄であるヴクを召喚する。名前の意味は「氣の荒いドラゴン狼」。伝説的な15世紀の狼憑きの領主「暴君」ヴクで、この大君主は前腕に赤毛の生えた血のように赤い母斑があり、火を吐く狼憑きだと思われていたといふ。

『**全てを知る者、回答者、罪悪に対する行為を施行する者、報復者、鎖の断絶、壊せぬ物無し。**『 フラガラッハ。』』

ケルト神話に登場する剣フラガラッハを召喚する。その一撃は鎧で

止めることは不可能であるといつ。さらに、どんな鎖も切り裂くことができるとされる。抜こうと思うだけでひとりでに鞘から抜け、手におさまるという。また、敵に向かつて投げれば、剣自らが敵を倒し、手元に戻ってくる。さらに、フラガラッハによつてつけられた傷は治癒されないといわれる。

『死後の馬に飛び乗れ。死に装束をつける。死後にとる食事を食べろ。火の海を越え氷の丘に来い。されば太陽は戻るだろ。』“エクシユキユ”『

サハ民族の伝承の大蛇エクシユキユを召喚する。人間の国と川で区切られた向こう側の世界を支配している。燃える火の海を越えた、氷の丘の上の巣に棲んでいる。

『往々にして残るもの無し。泣き叫ぶもの無し。殲滅の行進、優越の凱旋。地獄の来訪者。』“エクスタルタロ”『

偽装呪文。

『72柱の1柱。序列13、85の軍団を収める魔神。怒りの召喚、ハシバミの杖を向け描く。奏者の鼓動に合わせ出陣。護符となる銀の指環。忘れることなく死の指へ運べ。我は告げるソロモンの封印を破る主。来たれ怒髪衝天の王“ベレト・ソロモン”』

ベレトはソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の85軍団を従える序列13番の恐るべき大王である。青白い馬にまたがりトランペットをはじめとする楽器が鳴り響く中で現れる。召喚された時点で既に激怒しており、召喚者は彼の怒りを免れるためにハシバミの杖で南東の方角に向かつて正確な三角形の結界を描き、召喚儀式に従つてその中に入るよう命じなければならない。ベレトに命令する際には絶対に王者に対する礼儀を欠いてはならず、また常に左手の中指に護符となる銀の指輪をはめて相手の顔に向け示し続けなければならぬ。

『真の影。『影の王[冠]』
ベレトの持つ漆黒の剣。

『44の軍勢、無限であり夢幻の攻城。最高末路の生き地獄、解放にして開放の死路。準備は出来た。最上の待つ戦争を迫れ。“ロード・デス・ウォーヘル”』

偽装空間の様なベレトの箱庭。過去に彼が墮とした城、戦車、兵士などが飾つてある。別にそれらを使うわけではなく、単にベレトが寛ぎたい時、気に入つた相手を招きたい時などにこれを使用する。また“フィンブルヴェトルの冬”などの偽装空間呪文を使えないベレトが本気を出したい時に使う。

『祭壇に捧ぐ全能なる象徴。霞の向こうに残る眠り。水平線が地平線に混じり極光。鋸つく鉄鎖に刻印。天蓋に昇る終焉の柵。砂上の楼閣にて黎明の寝に就け。“Deus Occiditur Ter-rrarum”』

偽装呪文。そこで精製する武器は全て神殺しの武器で、一撃刺されば対象は神性を失う。

『72柱の1柱。序列66、20の軍団を収める魔神。勇猛なる黒光りの戦士。文学を与え、勇猛心を与え。悪靈の統括。迅速なる行動値。来たれ勇猛果敢の戦闘神“キマリス・ソロモン”』

キマリスはソロモン72柱の魔神の1柱で、地獄の20の軍団を率いる序列66番の強力な大侯爵。黒い名馬にまたがつた黒い肌の勇猛な戦士の姿で現れる。アフリカの全ての悪靈を統括しているとされる。召喚者を勇敢にしたり、召喚者に完璧な文法・論理学・修辞学を教えることができ、また失くしたり隠された事物や財宝を見つけ出すことができる。人を兵士の姿に変化させたり、海や川を迅速

に渡らせたりすることができる。

『桎梏の力。ただ単純に圧倒し壊す。 “戦闘神”』

刀身3mの大剣。

『真桎梏の力。ただ単純に圧巻し殺す。 “真戦闘神”』

刀身6mの大剣。“戦闘神”の3mに今までキマリスが粉碎してき
た剣の破片が加わることにより6mの大剣を形成している。

『文化の遺産。666の軍勢、全ての智慧が詰まる家屋。無限の回廊に無数の螺旋。連なる階は塔より劣り5連。然りとて劣るはずもなく、叡智を受け継ぐ狼煙は上がる。 “図書館”』

偽装空間の様なキマリスの書庫。この世とあの世、天の国地の国全ての書物が備えられている。多数のグリモアも保管されている。

『72柱の1柱。序列44、30の軍団を収める魔神。命を運ぶ鳥。感覚の与奪者。財の限りを集め与え。来たれ虚言の侯爵“シャックス・ソロモン”』

シャックスはソロモン72柱の魔神の1柱で、30の軍団を率いる序列44番の地獄の大侯爵である。召喚すると、しわがれているが纖細な声で話すコウノトリの姿で現れる。召喚者の命に応じて人の視覚、聴覚、理解力などの知覚を奪い去つたり、金や馬を盗み出す力を持ち、優れた使い魔も与えてくれる。また、神聖な事柄や悪魔たちが守つていらない隠された財宝のことも教えてくれる。シャックスはあるゆる点において召喚者に忠実で従順であると約束するといく。ただし、シャックスは魔法陣の三角形の中にいない限り嘘をつ

く。

『解説。一重二重三重四重。連なる列なる層44。対象””。 “解説”』

対象の呪文を解除する。
除
『

全体的設定（前書き）

全体の設定です
更新するかも

ワレラ

罪を犯し、罰を受けない者に相応の罰を与えるための部隊
ワレラになれるのは咎人だけ

咎人で、犯した罪に正義や歴とした意志がある者、またワレラに淨化された時に生きたいと強く思うか、唯一やり残したものがある者のみ

更に、その殺しに正当性があった者のみという条件もある

ワレラは二つのクラスで構成されており、KillingとNon-KillingのダブルミーニングであるナイトとBorgとBriteを組み合わせたBRIGHTがある

『犯罪の透視』

対象が犯した罪を見ることが出来る目をワレラは持つ。あまりにも小さい罪は見えない。

『隕の見掛け』

ワレラの存在を究極的に薄くしている“膜”のようなもの。正か負の状態のワレラを認認出来るのは、正負の状態のワレラと、殺意を向けられた人間、直接触られた人間のみ。カメラやビデオなどの映像媒体では、ワレラの姿全体がぼやけ、まともに写すことは出来ない。

『隕体化』

基本的に使用不可能な特権。拠り所から現世に戻った数秒くらいしか普通は隕体になることはない。D·GOなどの特殊なワレラくらいしか使つことは出来ない。

『オムニス ベリオリズモス テツラ
『全てを束縛する国』

『曲解の輪廻』を作り出している特性。個人の特性ではなく、言わば世界の特性である。ただこれを保ち、担っているのは不快者の↙e・I・E。束縛などは全てにとつて不快の対象なので、不快者である↙e・I・Eくらいしか支えることが出来ない。

『魂補充』

ワレラが咎人を10人、または同胞を1人殺す、もとい浄化する度に魂を一つ得る。実際は各ワレラがおののおの持つていてるわけではなく、『全てを束縛する国』に魂が集まっている。

ゴニオン

二つ以上の呪文を組み合わせて使うこと。“千刃の谷・グロアーディ”など

召喚体

呪文により召喚される武器や防具、人、竜などの架空の生命体などのこと。使えば使うほど経験値を溜め強くなつていぐ。しかし折れたり敗北したりして消滅した場合はまた初期の段階へと戻つてしまふ。レベルを上げるには基本的に咎人や同胞を狩るしかない。そしてレベルが上がると共通特性や個別特性を修得していく。

特性

共通特性とは名の通り全てに共通する特性で個別特性は武器によつ

てそれぞれ異なる特性のことである。

共通特性“武器”

ワレラ＝咎人10人分

召喚体LV1＝咎人5人分

召喚体LV2＝咎人10人分

召喚体LV3＝咎人15人分

召喚体LV4＝咎人50人分

LV5 青

LV6 LV10 赤

LV11 LV15 銀

LV16 LV19 金

LV20 黒

LV1 咎人5人 『折れにくさ?』

武器が若干折れにくくなる

LV2 咎人10人 『使い勝手』

使い勝手がよくなる

LV3 咎人30人 『重さの無視』

持ち手に合わせて重さが変わる

LV4 咎人100人 『形状無視』

持ち手の思い描く形に変化する

LV5 咎人150人 『追撃?』

切り付けた時にもう一撃斬撃が飛ぶ

LV6 咎人170人 『幻影化』

刀身や矢などを不可視にする

LV7 咎人200人 『追撃?』

切り付けた時にもう一撃斬撃が飛ぶ

Lv8 咎人300人 『擬似の間合い』

『幻影化』を使つていない時に使用可。刀身が見た目より1・5倍程長く、幅も1・5倍程広くなっている

Lv9 咎人350人 『追撃?』

切り付けた時にもう三撃斬撃が飛ぶ。さらにその三撃から一撃ずつ派生させられる

Lv10 咎人400人 『同化』

武器と使用者の同化。つまり剣が人に人が剣に。『使い勝手』以上に使いやすく、より折れにくくなる。剣が負つたダメージは剣が、人が負つたダメージは人がそれぞれ受けるのでダメージが2倍になるということもない

Lv11 咎人600人 『折れにくさ?』

武器が折れにくくなるに加え、使用者の体も丈夫になる

Lv12 咎人700人 『山の銅』

武器が折れなくなる

Lv13 咎人750人 『炎纏』

刀身に炎を纏う

Lv14 咎人850人 『氷纏』

切り付けた部分を凍らせる

Lv15 咎人1000人 『離反』

『幻影化』と『擬似の間合い』を同時に使える

Lv16 咎人1500人 『雷纏』

刀身に雷を纏う

Lv17 咎人2000人 『双頭』

直ぐに消える“千刃の谷”とのユニオンと違い、手に持つて使える召喚体をもう一本召喚する

Lv18 咎人2500人 『剣雨』
(けんう)

選択範囲に召喚体の雨を降らす。呪文ではないので詠唱無し

Lv19 咎人5000人 『剣岳』

選択範囲の地面から召喚体が飛び出でくる。呪文ではないので詠唱無し

L v 20 咎人15000人 『天咎』

一日一人無条件で殺せる

共通特性 “英雄” “悪魔” “竜” etc
咎人かワレラを殺すか相手の召喚体を倒す度に経験値を得る

ワレラ 『咎人10人分

召喚体 L v 1 『咎人5人分

召喚体 L v 2 『咎人10人分

召喚体 L v 3 『咎人15人分

召喚体 L v 4 『咎人50人分

』 L v 5 青

L v 6 』 L v 10 赤

L v 11 』 L v 15 銀

L v 16 』 L v 19 金

L v 20 黒

L v 1 咎人5人 『耐久力?』
若干死ににくくなる

L v 2 咎人10人 『意志疎通?』

半径100m以内なら離れていても会話出来る

L v 3 咎人15人 『(羽無し) 飛行(羽有り) スピード?』

羽の無いものは若干飛行可能に。有るものは1・5倍速く動ける様になる

L v 4 咎人30人 『(羽無し) スピード? (羽有り) サイレン

ス』

羽の無いものは1・5倍速く動ける様になり、有るものは羽ばたく音がしなくなる。

Lv5 焚人50人 『耐久力?』

死ににくくなる

Lv6 焚人100人 『スピード?』
3倍速く動ける様になる

Lv7 焚人150人 『距離の無視』
5m以内に瞬時に移動出来る

Lv8 焚人200人 『意志疎通?』
半径300m以内なら離れていても会話出来る

Lv9 焚人350人 『鷹目』

500m先に落ちている一円玉が見えるくらいの視力を与える

Lv10 焚人400人 『高速』

10倍速く動ける様になる

Lv11 焚人600人 『聖者?』

ナイトの召喚体であれば“千刃の谷”、BUILT eであれば“ラムティル・ヴィーグ”を使えるようになる。詠唱拒否は不可能

Lv12 焚人700人 『耐久力?』
一回だけ死んでも直ぐに生き返られる。レベルのリセットもない

Lv13 焚人850人 『盛毒』

対象に毒を盛る

Lv14 焚人1000人 『幻影化』
フレラや召喚体から姿を消すことが出来る

Lv15 焚人1500人 『同化』

召喚体と召喚者の同化。つまり召喚体が人に人が召喚体に。

Lv16 焚人2000人 『聖者?』

ナイトの召喚体であれば“ソードファイッシュ”、“スレイ・ライ・サントエク”、BUILT eであれば“イステーク・ネスダク”、“鬼人面相”を使えるようになる。詠唱拒否は不可能

Lv17 焚人2500人 『双頭』

召喚体が自身を一体召喚する。LV1で喋ることは出来ず、戦うことしか出来ない。これが咎人を殺したりした場合の経験値は召喚体に入る

LV18 咎人5000人 『聖者?』

ナイトの召喚体であれば“ベエヤード”、BUITEであれば“ブレパス・ア・イカト”が使えるようになる。詠唱拒否は不可能

LV19 咎人15000人 『天咎』

一日一人無条件で殺せる

LV20 咎人30000人 『ワレラ』

召喚体自体がワレラになる。ナイトの召喚体はナイトに。BUITEの召喚体はBUITEに

個人の固有特性

左字の『最奥の地下水路』や妙の『ハンシャの国』のような、ワレラが一個人として持つている特性。

“国”や“空”、“海”とつく特性もあり、基本的に国、空、海の順に強力だが、そもそも特性毎に性質が違うのだから比べるのはあまりよろしくない。

主に自らの呪文を強化させたり、自らを守つたり、精神を攻撃するものがある。

自らの精神構造を弄りそこに相手を飲み込む『最奥の地下水路』、自らに仕掛けられた呪文を跳ね返し更に相手の呪文を不起動とさせる『反射>ハンシャの国』、負の深層心理に引きずり込む『心理の国』、オリジナルの5割強コピーを作り出す『守護神』は個人の固有特性の最たると言える。

離れればこそ見えるモノもある（前書き）

彼は苦い。

他に近くすなんて凡そ人がやるのではないのに。
彼は甘い。

他を慈しむなんて凡そフレラがやることではないのに。
私たちには所詮魂の狩人。

他の魂を自らに、自らのためだけに循環させる極めた利己主義者なんだ。

君は確かに苦いし甘い。

けれど君の存在意義、義務、思考する必要の無い犠牲を理解している。

理解していると思っていた。
けどダメだったみたいだね。
君は一旦離れる。

新西より遙かから疋音を響かせおいで。

離れれば「」に見えるモノもある

光の膜が消え、落ちたクラウ・ソナスも消えた。

そしてそれらより前に消えた吾桑は消えたまま戻つてこない。

S・A「・・・一体なにが起きた。ヴュールの奴も姿が見えないし・・・。」

「 」

「 」

「 」

「 」

まだ畠の部屋に居るということは奴も此処に

「 真理ならもう出てつたよ。不快者を連れてね。」

S・A「・・・特性反射か。何時から見てたんだ妙。」

T・O「・・・最初から。君が建設予定地に来た・・・時から更に遡つた30分程前からね。」

S・A「は・・・。ホントに最初からだな。客観的に見ていたお前なら分かるよな?」

T・O「快楽者のこと?」

S・A「ああそうだ。どこに行つた。」

T・O「ん~難しい質問ね。敢えて言つなら不快者と一緒になつたつてとこかな。」

S・A「それは一体どういう意味だ!」

T・O「『快楽主義者の空』を不快者に埋めたのよ。結果、快樂者の体は消滅。この世から幸福は消えましたとさ。めでたしめでた」

「 」

S・A「ふざけるな!」

気づけば俺は、妙の襟首を掴み桜の木に押さえ付けていた。

S・A「なにがめでたしだ! ふざけるのも大概にしろ!」

T・O「・・・なにイライラしてんの左宇君?」

S・A「人の・・・! 数日とは言え一緒に過ごした奴が死んで何がめでたしなんだよ! 答えろハンシャヤ!」

「初めてハンシャって呼んだね左宇君。ホント君は甘いよ。」

「なに?」

「本当は私のことを怒りたくない。けど怒りなきゃならないからせめて違う名を責める。それで私が受けたるひつじコックを少しでも軽くしようとした。ね?」

「だったらなんだ。お前に對して腹を立てて元のむけ変わりはないぞ!」

「分かつてるよ。」

「こいつ・・・。」

「あのね左宇君。私たちが生きてる世界に勸善懲惡なんて言葉は存在しないよ?」

「はあ?」

「左宇君もそれくらいは理解してゐつて思つてたんだけどな。」

「そんなものはお前の勝手な解釈だ!」

「かもね。」

「要領を得ない事ばかり話しゃがつて・・・。」

「普段なら妙のふざけた話も聞き流せるが今はダメだ。怒りの蓋が今にも開きそうだ。」

「他の犠牲無くして生存は有り得ないの左宇君。快樂者の犠牲も貴方の犠牲も、全ては生存に繋がるの左宇君。だったらいいじゃない左宇君。」

「もうダメだ。」

「今、今分かつたよ。お前はおかしいと思つてたがそれは寸分違わず本当だつたらしいな!いや俺が思つてはいる以上、10割増しでお前は狂つてる!」

「生きられないなんてのは嘘だ・・・。」

「分かつたよ左宇君。」

「なんでそんなに俺の名を呼ぶ。」

「…………だってね左宇君。当分呼ばなくなりそうだから、今のうちに書つておこうと思つたんだ。」

意味が分からぬ

腹に違和感を覚える

食道を驚かせる呻吟感

黒田一之助

これは・・・デュランダル・・・?

音頭三十六
音頭三十六
音頭三十六
音頭三十六
音頭三十六
音頭三十六

デュランダルを・・・詠唱拒否だと?

当たり前の様は口から血が溢れてぐ

「……川の單屬で阿呆の力いに済り力も用意其他のものに止まんて必要ないだろ。

「そしてね左宇君。外環から私たちを眺めなよ左宇君。

「意未 分かる奴」。

・ A 「なんで、俺の名を呼ぶ
・
・
・
?」

ト・オ・・「一時お別れだからだよ左宇君。
・・・“魂の権限を私

に”。>>死者の書<<。魂の経過に興味は湧く。導く死の魂と旅路。解脱し、生きていく。“バルド・トエ・ドル”。

妙の右手に死の色が宿る。

（）
あれを三番
遠方から足音を響かせまい

右手が俺の体に迫る。

「うーん、これは思えないし、逃げられると、思えない

ト　・　・　・　バイバイ左宇君。ごめ

妙の言葉が中途で途切れ、ついでに俺の意識も一時停止した。

離れれば「」そ見えるモノもある（後書き）

また此処に来るとはね。

O N 「意見の不一致か。離婚の理由みたいだな。」

S・A 「馬鹿言つな。結婚していないのにどうやって離婚すんだよ。」

O N 「ま、良い機会だ。世界中を回らせてやる。」

S・A 「そんなことして何になるってんだよ。」

O N 「人は千差万別多種多様に存在する。人という括りはあれやはり同じ人間は存在しない。考え方もまた然り。」

S・A 「・・・つまり、世界中回つて様々な考え方を感じてこいつてことか？」

O N 「理解が早くて助かる。」

S・A 「・・・」

新西市に戻つたところでまた妙に殺されるだけか。
それを抜きにしても今あいつとなんか会いたくもない。

O N 「因みに不快者だが・・・。」

S・A 「そうだ・・・奴はどうなつた！」

O N 「これから話そうとしとるじゃないか。黙つて聞け。快楽者が『快楽主義者の空』を不快者に打ち込んだ。これは知つているな？
それによつて不快者の中の不快がかなり弱まつた。不快者はこれから1年眠りに就く。」

S・A 「じゃあその間に殺せば・・・。」

O N 「そんなことをすると、快楽者も完全に死ぬぞ。」

S・A 「そりやどういう意味だ！」

O N 「喚くな。・・・ま、とにかく不快者は休むんだ1年。その間に世界中を回つて、お前と同じ考え方の奴を見つけだす。どうだ？
さつき出した理由より合理的ではないか？この理由があれば、今回の旅にも意義が見出せられる。違うか？」

S・A「・・・1年間起きないって情報の信憑性は。」

OZ「100%だ。彼女が最後に残した希望を疑うとはなかなか厳しいなS・A。」

S・A「ふん。」

事の末路を知らないのに信用できるか。

S・A「・・・分かった。あいつも言っていた。俺はまだいける。生きている限り何処までも行つてやるよ。」

あいつが成し遂げたかった事を完遂するために。

OZ「よろしい。では行け。まずは味方を作りにな。」

OZが手をパンと鳴らし、俺の意識は再び消えた。

・・・何処へだつて行つてやる。

プロローグ・嘘は嘘 -

嘘には基本的な2種類がある。

すぐばれる嘘と、時間が経つてからばれる嘘。

そして永久にばれず墓場まで持つていいくか、自ら暴露する嘘の3種類だ。

まず第一の例として挙げられるのが『嘘には基本的な2種類がある』といふ嘘だ。

すぐばれる嘘を吐く奴は間抜けだと思つかもしれないがそうではない。

すぐばれる嘘を吐くのは慌ててているからといつ訳でもなく、心に潜む“罪悪感”から来るものなのだ。

嘘を吐くのは良くない。

だけど怒られたくない。

けど嘘はダメなんだ、といふ罪悪感がすぐばれる嘘を吐くのだ。
ま、別の見方をすればすぐばれる=すぐ怒られる=短いお叱りで済むとも・・・。

オホン、時間が経つてからばれる嘘の例を挙げよう。

あるところに兄弟がいた。

母親が外出中兄は、食べてはいけないと言われたお菓子を食べてしまつた。

弟にも食べさせこれで同罪。

告げ口すればお前も怒られるで、と脅し口止めとした。

けれども、それではまだばれる恐れがあると考えた兄は弟を殺し埋めました。

数時間後、母親が帰ってきて兄に聞きました。

お菓子を摘んでないだろ? うね?

兄は答えます。

勿論だ、僕は約束は守るよ! -

母親は聞きます。

弟の奴は何処に行つたんだい？

兄は答えます。

遊びに行つたよ。

母親は言います。

こんな時間にかい、全く何処に行つたのかねあの子は

兄は言います。

さあね、探してこようか？

さ、長くなつたのでこの辺で切りましょ。

今回の話は嘘とは全く、関係ありません。

・・・ん？

体中が痛い。

えー・・・俺は・・・んー・・・。

思い出した、ONに送られたんだどこかの国に。

送られた時夜だったのも手伝つて、路上で寝てしまつたんだ。
そりや体も痛くなるわな。

体を起こし座る。

S・A「んー、ああ・・・。此処は一体どこの国なんだ。」

「ブエノスディアス！」

S・A「どわつ！？・・・は？なんだあんた！」

背後から男が話しかけてきた。

びっくりしただらうが！

男「ハラペーニョーガラパチア？」

こいつは何を言つているんだ。

S・A「あー・・・アイキヤンスピーグジャパニーズオンリー。ア
イアムジャポーネ。」

男「オーウジャポーネ！メティシナベロシナカラソペペロンチーノ
？」

・・・こいつ頭おかしいんじゃねえのか？

S・A「日本人だつてんだろ。喚くなよボケ。日本語かせめて
英語で話せや！出来ないならどうか行け！」

男「ンンー。ポドリアトラエールメエルデサジユノラコミダラセナ
アミアビタシオンポルファボール。」

この野郎・・・。

寝起きで、しかも体中が痛い。

S・A「最高にいらついてるんだよ今！アイアムアングリー！ニア
ヘッドイズクレイジー！アーハーン！」

「ポドリアブスカールメアルグンインテルプレテデハボネ?」

「もづ一人背後から来やがつた・・・。」

S・A「だから・・・アイアムジャポーネつつて」

「日本語の通訳が必要かなお兄さん? その男はな、あんたに麻薬いられねえかつつてんの。ドーコー・アンダースタン?」

S・A「は・・・?」

「一体誰だこいつは。」

男「ヘイシオン! ヨエネジャスルンマジャ!」

シオン? 「あ? ふざけんなよタコ! 同郷の友にヤク売ろうなどぞこの俺が許さねえぞ?」

男「オ、オーウ、ハハハ。サンルイカダウジヨ。ジャ、ジャアナシオン。」

新たに現れた男の気迫に押されたのか、先の男は舌打ちしながら行つてしまつた。

シオン? 「つたくあの野郎は。」

S・A「あ、あのー。」

シオン? 「ん? ああ大丈夫だつたか?」

S・A「あ、いや、うん。助かつたよありがとう。」

シオン? 「ははは、なんてことないよあれくらい。・・・あんた、

此処で寝てたのか? 日本人だよな?」

・・・ 一体どうやつて説明すべきかな。

S・A「まず一つ目の質問に答えるよ。俺は日本人だ。あんたもそうみたいだな。」

シオン? 「ああ。生糀のジャポーネさ。」

S・A「そりや良かつた。・・・あー、一つ目の質問だが・・・。」

シオン? 「分かつた。みなまで言づなー。」

S・A「は?」

シオン? 「お前は見たところパスポートを持っていない。つまり不法入国だろ?」

S・A「あー・・・?」

違う、と言い切れない所が痛い。

やり方はどうあれ不法入国みたいなもんだ。

S・A 「・・・いや不法入国つづーか不可抗力つづーか。マグロ漁

船・・・は関係ないし・・・。」

シオン? 「あはははは!面白いなあんた!いいよいよ何だつて!」

取りあえず飯でも食いにいこうぜ兄弟!」

S・A 「お、おう?」

・・・一体此処はどこなんだ!」

酒は飲んで溺れる！飲酒は20歳から

シオン？「カルド・デ・レス。牛肉のスープだ。カルネ・アサーダ、ステーキだ。クエルボ、サウザー、ドン・フリオ、テキーラ・サンライズ、コロナビール。好きなものを飲めよーははは。」
麻薬を売られそうになり、テキーラを飲ませられよつとしている。今分かつた。

此処はメキシコだ。

・・・えーと、アメリカの下とかそんな感じだつたかな？

地理はダメなんだよ。

S・A「朝からこんなに食つて飲むのか？」

シオン？「当然だ。ははは、なんだ？朝は食わない派か？」

S・A「ま、まあこんなには・・・食わないかな。」

今は食べる必要がない体だから普段は食べていない。
まともな人間の時も抜いてばかりだつたけど。

シオン？「そりやいかんな。朝飯は一日の活力と言つても過言じやない。朝からテキーラを飲まなきやメキシカンじやねえぞ！」

S・A「俺メキシコ入じやないし。・・・いやお前もメキシコ入じやないじやないか。」

SION「あはははは細かい事は気にしちゃーだぜ。つとめういやまだ自己紹介してなかつたな。俺の名前はシオン。S、I、O、Nでシオン。どうだ？イカす名前だろ？」

S・A「あ、ああそうだな。俺は阿部左宇つて名前だ。左宇とでも呼んでくれ。」

SION「左宇ね。よろしく。取りあえず飯はいい。コイツを一杯やれよぐいつと。」

ジョッキになみなみ注がれたテキーラ。

洋酒なんて飲んだことねえよ。

SION「ほれどうした？ぐいっとこつちまえ。」

・・・まあ欺体だから大丈夫か。

S・A「よし・・・んつ！ん、んんんん。」

SION「あははははいい飲みっぷりだ！」

S・A「いぐいぐいぐいぐいぐ。」

SION「・・・いやちょっと待て。ぐいっとは言つたが一氣は不味いんじゃないか？」

S・A「・・・ふはー。」

不味・・・。

SION「大丈夫か・・・？」

S・A「ん？ああ大丈夫。意外とイケるもんだな。」

SION「・・・。あはははあはははははは！お前やっぱ面白いわ。」

S・A「そうか？」

SION「ああそうだそうだ！氣に入つた！同郷のよしみだ、お前が何しに来たか知らねえが世話してやるよ。」

S・A「そうか？」

助かると言えば助かる。

金もなければ家もない。

食つ必要も寝る必要もないから氣にする必要もないかもしれんが・・・。

孤独は人を押し潰す、かな。

初めての海外だし誰かと一緒にの方が安心だろ？

S・A「じゃあ・・・よろしく頼むよシオン。」

SION「おうよろしくな左宇。」

この固い握手が一生物になるとは思わなかつた。

SION 「潜入捜査?」

S・A 「ああ。此処はヤク中や密輸業者の吹き溜まりだろ? 地元警察も辟易してゐる。そこで外部の俺達に依頼がきたんだ。」

SION 「ふーん? 嘘だろそれ?」

S・A 「・・・ま、信じるも八卦信じないも八卦だ。・・・そういうな、例えばあの倉庫。秘密なんだ、があれば麻薬貯蔵庫なんだよ。」 適当に指差した倉庫に汚名を着せる。

スマンな適当な倉庫。

SION 「ああ知つてゐる。」

S・A 「知らなかつただろつてなんでやねーん。」

いへりメキシコつて言つてもそつホイホイ麻薬貯蔵庫なんてないだろ・・・。

SION 「いへり一帯の倉庫は全部そつだぜ。警察は勿論そへりのガキだつて知つてゐる。」

S・A 「・・・クレイジーだな。・・・オホン。俺は此処の麻薬シンジケート? を駆逐するのが仕事なんだよ。」

SION 「此処は確か100へりのシンジケートが鎬を削つてるぜ?」

S・A 「・・・全部だ全部! 全部ぶつ壊してやるよー。」

SION 「おうこーな。」

S・A 「へ?」

SION 「俺もそろそろぶつ壊そつと思つてたんだよ。あはははは爆破は任せといてくれ!」

S・A 「あはははそりや心強い・・・。」

おかしな話になつてきやがつたぞ。

シンジケートをぶち壊すのはいい。

なんたつて咎人が溜まつてんだからな。

ただそこに一般人を巻き込んでいいのか？
ん～・・・。

「ヘイ！テメエラナニヤツテンネン！」

S・A「な、ななんだあ？！」

脇道から男が出てきた。

SION「倉庫を見てたんで絡まれたな。」

S・A「面倒だ。ほかつといづ。」

男「ウエイウエイウエイ！」

無視して行こうとしたら回り込まれた。

男「ナニヤツテンツテキイトンネン！テメエラタダジャカエサヘン
デ！」

んんん？

俺は天才か？

スペイン語が理解できる気がする。

しかも関西弁風に。

男「ヘイ！キイテンノカコノヤロウ！」

S・A「ち、喧しいな・・・お？」

男「ナ、ナンドヨ？」

男の背後に回り込んでみる。

『サツジン』7回、『IHOU薬物TOUYOU』20回、『NAR
COTIC SYNDICATE』・・・？

カタカナと漢字にローマ字、最後は英語。

殺人と違法薬物投与は分かるが、なんたらシンジケート？

SION「麻薬シンジケート。まさにお前が狙つてる獲物だよ。
“我は成す我を成す”」

え？

SION「Createナイフ。『火フォテイアとスタフテイなり灰スとなれ』。」

男「ナンダイツタ、ガ・・・アガ・・・。」

SION「・・・死ぬほど溜めた。もう十分だろ。“エクス”。

男「ガバ・・・タハ・・・！」

S・A「な・・・！」

男に刺さつたナイフが爆発した。
いや、正確にはナイフの刃、つまり男に刺さつた部分だけがだ。
恐らく破片は男の体の中に飛び散り致命傷を与えた。

現に男は倒れ、地面には腸と血が飛び散つている。

S・A「お前・・・。」

SION「男のスペイン語はそれなりに和訳されたか？文字は完璧
じゃないみたいだな。」

S・A「お前もワレラだったのか？」

SION「ああ。SION。お前はS・Aだな。11位の水路。」

S・A「左宇だ。」

SION「そうかスマンな。」

S・A「いつ気付いたんだ？」

SION「名前を聞いたときはピンとはこなつた。ランキングで
“S・A”という名は知っていたが阿部左宇なんて知らなかつたか
らな。」

S・A「・・・じゃあ俺の特性は？」

SION「『最奥の地下水路』。<sup>エラヒストス
タナトス</sup>えらいけつた的な名前やわ。」

・・・さてどうしたもんかね。

俺はこいつのことを知らない。

ワレラのランキングがあるつてのは知つてゐるが、まともに見たこ
とはないからな。

特性は恐らくさつき使つた『火となり灰となれ』つてやつだ。
爆発させるのがその能力だつ。

SION「へイ！へイへイへイ！左宇！」

S・A「・・・聞こえている。」

SION「なんやえらこ考へるみたいだけど、俺はお前を殺そな
んて思てへんで？」

S・A「なんで関西弁風に話すんだ？」

SION「なんでやろね話しやすいからとひやう？」

いやちやつ言われても分からんちゅうねん。

S·H·O·N「俺はな、自分で言つのもなんだが基本的に正義や。皆大好き深部ちゃんよりしくな。あはははは。」

S·A「シンジちゃん?」

誰だそりや。

S·H·O·N「ああ自分知らんか? D·W·N、轍醍醐や。知らんか?」

S·A「醍醐か! 深部・・・ああ。」

あいつの特性は・・・つてよく考えたらあいつの特性なんか知らんわ。

S·H·O·N「深部の特性は『深部に至るは全てを知つた』。えらいかつこええ名前だろ。能力 자체も」

S·A「いやいい。あいつと戦つことはないだらつこ戦つ氣もないからな。聞くとしてもあいつ自身からだ。」

S·H·O·N「さよか。ほな行きますかね。」

S·A「・・・何処に?」

S·H·O·N「おいおい。自分記憶力無さすぎちやう? 麻薬シンジケートぶつ壊そつ言つたやん。手始めに此処らの倉庫一掃するで。」

・・・本気だつたのか。

まあいいか。

体のいい小遣い稼ぎだ。

殺しには殺しき

散らばる白い粉。

小麦粉、片栗粉、「一ンスター」、澱粉、何故かそば粉にわらび粉。極めつけは大麻、ヘロイン、メタンフロタミン。

S・A「・・・なあ。」

SION「ああ?! なんか言つたか左宇!」

S・A「いや・・・なんでもないです。」

これはあくまでも仮定だが、普通の倉庫も爆破しているんじゃなかろうか。

だつて小麦粉が飛び散つてんですよ?

・・・ま、深く考えないでおこづ。

SION「・・・しかし詰まらんな。」

S・A「何が?」

SION「爆破に驚きよつて皆逃げていつてしもたやん。これじゃ

魂補充は稼げんで。」

S・A「確かに。」

俺としては小麦粉を大切にする従業員を殺さずには済んで助かってるけど。

SION「ま・・・カルテルの本部が此処にあるわけやないしな。前哨戦みたいなもんや。」

S・A「そうか。」

“千刃の谷”。

最後の倉庫に“千刃の谷”を叩き込む。

“ひえあ!?”

S・A「・・・何か聞こえなかつたか?」

SION「悲鳴、やないか?」

粉が詰まつた袋に囲まれつづくまる男。

結構マツチヨだけど・・・わざの悲鳴はこいつがあげたのか?

S・A「情けねえな。ほれ、立てるか?」

手を差し延べてやる。

意識を向けないまま、若干届かないようにだ。

いきなりだがワレラが、ワレラと一般人を見分ける術はない。

一般人の方がワレラを見分けられるんじやないかとも思える。

何故なら、正だろうが負だろうが零の状態だろうがワレラには見えてしまうからだ。

街中で剣を振りかざしていれば分かるが、そんな奴は滅多にいない。

一般人は正、負のワレラは見えないから普段は無論意識出来ない。

が、ワレラから意識を向けられれば視認出来る。

何故こんな話しをしたか。

今俺は意識を向けず、更に手を伸ばさなければ届かないように助け船を出した。

S・A「ふん。なのにお前は船のへりを掴んじまつた。」

S・ION「成る程頭ええな自分。」

S・A「・・・お前、ワレラだな?」

男「ア・・・アアソウダ。」

S・A「こんな所で何してる。」

男「オマエタチトオナジダヨー。コノソウ」をぶちこわそうおもつた

んだ! だのにお前らいきなり色々ぶち込みやがった。」

随分滑らかに理解できるようになつた。

S・A「ふーん。」

S・ION「なんや? 納得出来へんのか?」

S・A「・・・いいや別に。・・・ん?」

男「全くビビつたよマジで。」

男がパンパンと体についた様々な白い粉を払いつつ俺達に背を向けていた。

S・A「・・・あれつて?」

S・ION「成る程な。」

男「ん? どうしたよ?」

男の背中に堂々と書かれている。

『MURDER』。

S・A「お前、一般人を殺してるな？」

男「・・・何の話かさっぱりだな。」

初めて一般人を殺したワレラに会つた。

ワレラも殺しをするが、咎人ならそれを罪と見做すことはない。

だが、一般人を殺せば確実に罪だ。

殺されるべくして殺される咎人はまだしも、殺される謂れの無い一

般人を殺すのは大罪なのだ。

その過ちを犯した者の背中には大きく『MURDER』と書かれる、
と○Zに聞いた。

S・A「生かしておく価値はない。」

男「は！戦うなら戦うけは・・・くあ・・・！」

SION「後方不注意や。」

男「ひきよ・・・うな野郎だ・・・！」

SION「なんとでも言え。ほなさいなら。」

爆発音と共に男の腹から血が噴き出した。

S・A「・・・聞いていいか？」

SION「なんや？」

S・A「例えばワレラが麻薬シンジケートに入つてたらそれも『犯
罪の透視』で見えるのか？」

SION「いんや。『MURDER』しか見えへん。だからこいつ
がどつかの組織の一員かどうかは分からへんな。」

S・A「カルテルがワレラを雇つている情報は？」

SION「あるで。カルテルの規模に依るが、大ききや10人おつ
てもおかしくないな。」

S・A「・・・分かつた。疲れてないか？大丈夫なら一気に潰しに
行こう。」

SION「オッケー行つたるやないか！
目指すは目の前に見えるビル群だ。」

・・・ワレラに物欲なんてない。

金が欲しいとも、でかい家が欲しいとも、高い車が欲しいとも思わない。

美味しい飯を食おうとも、いい女を抱こうとも、群れようとも思わない。

物欲もなければ性欲もない。

食欲もなければ睡眠欲もない。

凡そ人間らしい欲を欠いた人間がワレラだ。

SION「そら違うわ左宇。」

S・A「あ？ 声に出てたか？」

SION「いや。あまりに強く考えてるんで漏れてきたんや。」

S・A「・・・で、違うってどういう意味だ。」

SION「お前が一体どういうワレラと関わってきたか知らんけどな、そういう考え方のワレラなんてそうそうおらへん。確かに三大欲求は削られる。欺体やからな。だけどな、一般人が持たへん能力、呪文然り特性然り自由に弄れる体然りを持つとるんやで？それを有効活用し、ただの人ん時に出来へんかった事をやるというのが当たり前や。お前みたいな考えの奴は言つたらなんやけど、詰まらん奴ちゃ。」

S・A「そうかもしけないな。」

SION「なんやえらい無気力な奴ちゃな。これからドンパチやるんやで？」

S・A「分かつているさ。」

無欲だけは受け継いじまつたみたいだ俺。

ガシフエロ・ボンバ・カルテル。

この世界のメキシコで最も力を持つ麻薬カルテル。
聳え立つ30階建ての高層ビルの屋上に、このカルテルを仕切るガ

シフエロ・ボンバ三世がいる。

S・A「三世とか付く人って本当にいるんだな。」

SION「驚くところはそこかい。」

見た目は普通のビルで会社だ。

受付には受付嬢がいるし、スーツ姿の男達が世話をなく動き回っている。

S・A「・・・本当に此処が麻薬カルテルなのか?」

SION「ああ。さてどうするよ。正か負になつて偵察するか、それとも零のまま堂々と入るか。何にしてもいきなりドカンは避けたい。」

見た感じ一般人が結構いる。

ビルごと爆破すればシオンも『MURDER』を背負つてしまつ。

S・A「取りあえず偵察だ。俺達の情報が既に回つている可能性が高い。入社拒否で済めばいいがいきなり撃たれる可能性もなくはないからな。」

SION「オッケー。じゃあ一手に分かれよう。俺は『火となり灰となれ』を仕掛けてくる。お前はフレラらしき人間を探してくれ。」

S・A「了解だ。何かあれば心に訴えてくれ。」

SION「オーライ。上手くいくよう幸運を祈りう。俺達自身にな。

“魂の権限を私に”。」

シオンはBUILT e化し、裏口へと回つていった。

俺は側面の通風孔から行くかな。

これ程までに欺体を便利だと思ったことはない。

通風孔は子供一人が通れるかどうかという大きさだった。
身長110cmの細身に設定し中に入り込む。

S・A「ち。蜘蛛の巣が鬱陶しいな。」

匍匐前进のまま前へ前へと進む。

所々下が覗けるのでちらちら見てているが、これと黙り変わったところはない。

S・A「お、急に開けたな。」

壁の内側に存在する少し広い空間。

そこから真上に行く道と、左と右それぞれに行ける道がある。

・・・上だな。

立ち上がってみると。

S・A「・・・と、届かない。」

ジャンプするとこのアルミ的な道が外れそうだ。
気持ち悪いが、仕方ないか。

身長500cm、体重そのまま。
体を伸ばし上の道に手を掛ける。

S・A「よ・・・更に汚いな。」

所々黒ずみ、蜘蛛の巣もたくさんだ。
再び体を小さくし匍匐で進む。

2階でも1階同様人が世話をなく動いている。

これと黙り変わったところはない・・・いや、なんだこの違和感
は。

何かおかしい気がする。

S・A「・・・まあいいか。」

ずかずか進み、再び広い空間に出る。

また体を伸ばし上に行き体を小さくする。

それをあと7回繰り返し10階に出た。

3階から10階までは所謂事務スペース的な階だった。

カリカリと文字を書く音、カタカタとキー ボードを叩く音、ペラペラと書類をめくる音。

おかしな所は特ない・・・はずなんだが・・・。

やはり何か違和感を感じる。

普通にある風景だがそれが実はおかしい。

寧ろ商社マンはそうじゃなきゃいかんとかいう先入観がある?

・・・ダメだ意味が分からない。

S・A『あーテステス。そっちの首尾はどうだシオン。』

SION『お、ラッキーだな。いきなり捕まるとは思わんかったわ。順調やで。そつちはどうだ?』

S・A『今10階の通風路にいる。ワレラがいるかどうかはまだ未確認だ。』

SION『そうか。ま、気をつけてくれ。』

S・A『お前もな。』

あまり長くテレパシー的な会話をしていると他のワレラに漏れる可能性があるからな。

用件は短く簡潔に。

うーん・・・10階はもういいかな。

広い空間に戻り上に行く。

S・A「じほつ。げほ?」

いきなり粉っぽくなつた。

顆粒が見えるくらいだからよつほどだぞこれは。しかも通風路にいるからよけいだ。

S・A「・・・ゴーグルが欲しい。」

匍匐で進むこと3分、下に驚きの光景が広がっていた。

S・A「ビルの中に工場かよ。しかも11階に。」

麻薬製造中らしい。

防塵マスクにゴーグルを着けた作業員が働いている。

いいなあのーーぐ・・・ああああああ！

分かつたぞ違和感の正体！

眼鏡だ。

1階から10階までの眼鏡率が異常だつたんだ。
8割くらいの人は掛けてたんじやないだろうか。
それが一体何故かは分からん。
粉に目をやられて悪くしたか。
はたまた別の理由か。

いや待て待て待てよ。

シンプルに考えてみよう。

眼鏡を掛けているのが一般人、掛けていないのがワレラ！
有りがちだろこういうのは！

基本的に気づいちゃいかんことではあるな。

伏線を気づいた瞬間見破つたら伏線じゃないし。

S・A「だが、その可能性は大だな。しかしそうなつてくるとワレラの数はかなり多いぞ。」

SION『左宇！左宇！応答しろ左宇！』

S・A『つるさいな聞こえてる。』

SION『スマンな見つかつてもうたわ。俺は離脱する。』

S・A『了解。』

SION『こうやつて話してゐるからお前の位置もばれてるかも分からん。お前も離脱しい。』

S・A『あいよ。ど、ちなみにお前を見つけた奴は眼鏡掛けてたか？』

SION『ん？ん？・・・ああ掛けた氣がする。それがどうかすんのか？』

S・A『いや。後は合流してからだ。』

・・・眼鏡が一般人説はないってことか。

俺も出るかな
ガキヨ。

・・・嫌な音だ。

俺の真下から聞こえたこの音は明らかにやばい。
外れるか・・・?

・・・・・・。

S・A 「・・・よし。 もど

ガキヨン!

S・A 「どわーー!」

遅れてきた反抗期かよこの野郎!
粉まみれの床に華麗に着地する。

「ニヤーー! ギヤーー! ワーー!」

あちこちから響めきが聞こえる。

取りあえずワレラが居なきやばれることも
「いたぞあそこだ!」

S・A 「ち、いたのか。“ベルンズ・ニー・グリング”。
発見者を速やかに殺せば・・・!」

「わーー! やみてくれ!」

S・A 「・・・」

うずくまつちまつた。

S・A 「ん?・・・おいおい一体どうこいつだよこれはー..」

背中に『麻薬製造関与』数千回。

ワレラなら背中に罪を負つてこることしても『MURDER』だけの
はずだ。

S・A 「お前は一体なんだ・・・。一般人だろ?」

「・・・・・」

だんまりか。

まあいい取りあえず脱出だ。

窓に突つ込もうとして、踏み止まつた。

11階の窓なんて突進じや破れないよな。

「ウエイこら待て、ゴラー!」

後ろから大量のマッシュが押し寄せてくる。

眼鏡7人眼鏡レス4人か。

一般人7人とワレラ4人だろうか。

さつきの男は眼鏡掛けて・・・しまった覚えてねえ。

S・A「まいつか。“スレイ・ライ・サントエク”。

窓に光線を撃ち込み穴を空ける。

S・A「じゃあなマツチヨ諸君。また会おう。」

傘がありやメリーなポピングズだったのに。

至極残念だ。

眼鏡を掛けているのが目はある

SION 「眼鏡か。」

S・A 「眼鏡だ。」

SIONと外で落ち合い適当な店に入った。

目の前にはテキーラ各種とビール。

SION 「そう言わると確かに眼鏡は多かつたな。」

S・A 「何故だと思う?」

SION 「単純に考えると、その工場から出る粉に目をやられたかもしくは何かを区別しているか。つてことだろ?」

S・A 「その何かが、一般人とワレラのことだとしたら?」

SION 「成る程それだ!」

S・A 「眼鏡掛けてる奴のが多かつたから眼鏡が一般人、眼鏡レスがワレラだと思ったんだが・・・。」

SION 「ん? あ、そうか、だとすると俺が眼鏡に見つかったんはおかしいな。」

記憶を掘り下げて思い出したが、俺を見つけた奴はゴーグルを着けていた。

まさかワレラに麻薬製造をやらせる訳ないし、そもそも『麻薬製造の罪を被らない。

詰まるところ奴は確実に一般人ってことだ。

S・A 「まあいいや、一旦眼鏡のことはほかつといへ。『火となり灰となれ』はどれくらい仕掛けたんだ?」

SION 「大しては仕掛けないで。必要最低限、あのビルが倒壊する分だけだ。爆破自体は小規模だが、下にドンドン崩れてくるはずだから危ないな。」

S・A 「じゃあ中の咎人を全部殺つて、一般人が逃げてからだな爆破は。」

SION 「ワレラはどうする?」

S・A「邪魔なら倒す。そうでなきゃスルーで構わないだろ。」

ワレラを倒す方が時間が掛かるから極力戦闘は避けたい。

SION「よつしゃそれでええわ。もつばれちまつとるから正面切つて行くで。」

S・A「上等だ。」

あれこれ考えるのはやめたまんどうさい。

正面切つてぶつ壊す。

シンプルこそ最上級の作戦だ。

翌日の正午、ガシフェロ・ボンバカルテルビル自動ドア前には二人の見張りが立っていた。

どちらもライフルを所持し、サングラスを掛けた厳ついオッサンだ。
・・・襲撃なら夜が一番だが、あまり遅いと一般人は元より咎人も帰ってしまうからな。

決行は昼にした。

昨日見た限りだと事務スペースには咎人らしい咎人はいなかつた。

S・A「やるなら工場の奴らからだ。麻薬製造は生活のため仕方なくやつているかもしれないが、そんなこと知ったこっちゃない。」

罪だと分かりながらやつているなら許す謂ではない。

SION「せやな。ほなそろそろ行くかな。準備は?」

S・A「良くなきや来てないさ。」

SION「オーケーその意氣や。じゃあ行くで。」

地面に転がる石ころをシオンが掴む。

SION「『火となり灰となれ』。自動ドアにぶつかつた途端爆発する。俺が投げたら3秒だけ待つて突つ込むで。」

S・A「了解した。」

SION「よし。上手くいくよう幸運を祈ろう、俺達自身に。よー!」

小石が3個、放物線は描かず自動ドアへと直進する。

2・・・3!

物陰から走り出す。

俺達に気づいた二人のオッサンは何かを喫きつつ銃を唸らせようとした。

が、残念ながら響いたのは激しい爆発音だけだった。

石ころが自動ドアにぶつかり弾けたのだ。

厳ついオッサンだった何かを飛び越え、更に煙を抜けるとビル内部。

中は想像通り阿鼻叫喚・・・あれ?

SION「あちゃーしてやられたな。勤勉ではない思つとつたがまさか誰もいなとは。」

S・A「ああ従業員はいなないな。」

スマートグラスで中は見えなかつた。

一般人がいるかと思えば待つていたのはフレラ27人だつた。みんなグロアディを持つている。

S・A「没個性も極まつたな嘆かわしい。」

SION「ほんまやで。」

一般人がいなならさつさと爆破でいいかな・・・。

S・A「聞きたいんだが、一般人はこのビルに残つてるか?」

敵「工場は稼動している！」

SION「じゃあダメやな。爆破はラスト、華々しく散らしてやろうや。」

S・A「だな。左奥の階段から行くか正面の階段を行くか。どっちがいいよ？」

SION「俺はどっちでもいい。好きな方を譲つたる。」

S・A「自己主張は大事だぜ？まあいい俺は左奥に行かせてもらう。」

正面切るならシオンの爆破が有利だろ？

SION「オーライ。ほな殺るで。先ずは一人頭13人や。」

S・A「一人余計に倒した方が勝ちな！」

“ベルンズ・ニー・グリング”。

俺は左に、シオンは右に。

敵も迫つてきた所で、力試しだ。

S・A「“千刃の谷・グラム”！」

試しの刃がオッサン4人に突き刺さる。大したことはないな・・・。

後続の9人は弾きやがつた。

S・A「つと！マジかよ。」

9人の持つグロアディは全て金を纏つてている。

つまり16～19つてことが・・・。

敵「あはははどうした？勢いがなくなつたな。」

敵2「怖じけづいたんだろ。」

敵3～9「あはははははは！」

S・A「馬鹿野郎が。ますます殺す気になつた。」

特性『形状無視』。

グラムの形状を変化。

ツーハンドソード、所謂大剣にする。

・・・折られる覚悟でいかなきやならんな。

敵「成る程大剣にしたか。セニヨール、ビビるなビビるな。」

敵2「あははは無理な話だぜガルバ。格下だからビビるに決まつてんじやん。あつはははは。」

S・A「ふー。詰まんねえ井戸端してんなら通してくれねえかな？」

敵3「強がりだな。」

敵4「もういいや。さつさと殺つて一杯やうひげ。」

・・・ある奴のグロアディが2本に、ある奴のグロアディは透明に。炎を纏う物、氷を纏う物、電気を纏う物。

S・A「『双頭』、『幻影化』、『炎纏』、『氷纏』、『雷纏』か。特性のオンパレードだな感激した。」

ここまで来ると『離反』を使つてゐる奴がいてもおかしくないな。

敵「余裕かませるのももう終わりだぜザコ。」

その声を切つ掛けとし、9人の殺意の刃が向かつてくる。

纏系のグロアディはまともに受けちゃいけない。

雷グロアディを右にサイドステップで躱す。

そのまま雷野郎に斬りつけようとして、今度はバックステップで炎グロアディを躱す。

そのまま上半身を前に180。曲げ氷グロアディを避ける。

相手が2mの身長で来たのはラッキーだ。

欺体の真面目發揮してやる。

脚の筋肉を異常なまでに発達させ、上半身を左に捻る。

体を右に回転させつつ、強化した鹿のような脚で地を蹴る。

手にしたツーハンドグラムが狙うのはおよそ90cm上の太い腕だ。

敵4「ギャアッ！？ツアこの野郎！」

ブンブンと回転しつつ綺麗な放物線を描き飛んでいく右腕。

S・A「使い手がショボいと使われる方は可哀相だな！」

グラムに掛かっている『重さの無視』を一旦解除。

それによりグラムは見た目通りの重さ、約30kgを取り戻した。宙で体に更なる捻りを生じさせ、30kgの剣で男を縦に真っ二つ、それこそギロチンでも落とされたのよつに切り分けてやつた。

これで5人。

雷野郎が襲つてきてからここまで約10秒の短い攻防だったが、さすがに緊張した。

S・A「ふー・・・ん？どうしたよさつきまでの勢いは？・ビビったか糞野郎共？」

敵「ははは！ガシフロのビルに来るくらいだからそれなりに腕は立つと思っていたが、予想は裏切られなかつたよ。」「残り8人か・・・。

今話している奴が恐らく一番強い。

こういう時敵と話す奴は強いか弱いかの両極端だが、さつきの小さな戦闘を、まるで隙を見せず、瞬き一つしないで俺を観察していた。ドライアイにならないか心配だ。

敵「安心しろ俺は一番最後だ。先ずは7人の無頼を殺してみる。」「

S・A「そうかよ。ならさつさと倒してやるよー。」「Create剣3本。

左手に出現させた剣を炎野郎に投げつける。

続けてCreate剣3本。

前に突つ込みつつまた炎野郎に投げる。

最初の3本は弾かれたが、次手の内一本を弾き損ね右足に刺さつた。

敵3「ぬ・・・！」

あまり動搖しないようだが関係ない。

左斜め下からグラムを一気に振り上げ切り裂きついた。

S・A「……！一筋縄じゃ、いかないか！」

敵3「当たり前だ。」

敵3は俺が投げた剣を右足から引き抜きそれでグラムを止めやがった。

左手のグロアディが迫つてくる。

敵3「一死かはっ・・・！がほ・・・。」

S・A「残念。」

“スレイ・ライ・サントエク”を腹にぶち込み敵3から離れ

S・A「うわっ！？」

ようとして足が動かないことに気づいた。

しまつた凍らされた・・・！

敵2「油断しすぎだぞベルシル。」

敵3「げほ・・・ふつ！スマン。」

S・A「つておいおい・・・土手つ腹に穴が空いてんのに生きてる

？」

タフだなう・・・。

敵3「・・・次こそ一死。」

振り上げたグロアディが吹つ飛び耳を掠め壁に刺さつた。

敵2「なんだ！？」

敵3の上半身が爆発し、それによりグロアディは吹つ飛んだのだ。

S・A「助けるならもう少しちゃんと、ペツー助けてくれ。体中に

血が掛かつた・・・。」

SION「あはははスマンな。」

敵3の背後から放たれた3本の剣。

刺さつた瞬間爆発し、敵3の上半身は粉みじんになつたつてわけだ。

敵2「ち・・・馬鹿めが。」

S・A「はん。酷い奴だな。仲間が一人死んだつてのに。」

敵2「仲間？何を言つている。俺達はただ同じ雇い主に雇われているだけだ。仲間などではない。」

SION「寂しい奴ぢやなう。ま、なんでもええけど。」

残り7人。

S・A「数はお前の勝ちだなシオン。」

SION「余裕やで。俺の特性は個人にも集団にも有効だからな。ただ、殺り方に関して言えばお前のが綺麗だな。」

ぶちまけてるけどな色々。

S・A「スマンが、あと3人頼む。そのかわりあの4人は完全に殺してやるからよ。」

この後使うかもしれん。

SION「てことは・・・あれ使うのか?」

S・A「ああ。じゃ、終わつたら先に行つてくれ。」

SION「了解。」

S・A「すー・・・ふー。『最奥の地下水路』。対象、敵、敵2敵

5、敵6。」

日々是成長促進之賜物

精神構造が地下水路の様に入り組んでいる。

地下水路だからちゃんと出口はあるが、常に動き回つており見つけるのは非常に、簡単だ。

何故なら入口が向こうから来るからだ。

ただ、出会つたが基本最後。

魂を支払う覚悟が出来ないならば永久に逃げ回るがいい。

敵2「クソ・・・一体ここは何処だ・・・！貴様！」

S・A「先ずはお前か寂しい奴。」

敵2「“ボスディア・ラ・グロアディ”・・・“ボスディア・ラ・

グロアディ”！クソ！グロアディ！」

S・A「残念だが、お前じや力不足らしい。未熟な奴は生きられない。

会つたことはないが『最奥の地下水路』内部で召喚体を使える奴もいる。

いや、醍醐やペルソナは多分使える。

今更ながら、俺の周りには化け物が集まつてたんだな。

S・A「んー成る程。」

敵2「なんだよ！」

S・A「心の痛手73。負い目は4か。」

都合473回無条件でこいつは死ぬ。

S・A「残る魂補充はたつた1。どうだ？覚悟は出来たか？」

敵2「何ふざけたことをおあつが！？」

S・A「つるさい。」

四方から飛んできた剣が敵2に突き刺さる。

敵2「がふは・・・一体なんだ・・・？」

S・A「ここは俺の精神の中だつて言つたる。基本的に想像通りにいくのが深層心理なんだ。最下辺こそ一番制御しやすい。だから剣

をお前に突き刺すことも、お前を殺すことも出来る。つてもういいな
いか。」

此處は確かに精神構造なんだが、それは構造だけで、呼び込んだ俺
と相手は現実構造、つまり肉体的存在というわけだ。
血は本当に流れている。

命は実際に落ちていく。

ただの精神攻撃とは違うところはそこだ。
精神破壊なんてちゃちなことはしない。

やるなら殺るで徹底だ。

敵2は完全に死に、『最奥の地下水路』から落ちていった。

じゃ、次は・・・敵5にするかな。

S・A「・・・位置確認。転移動作、座標11・253・46。」

此處の広さは俺も把握していない。

転移動作は俺だけが使え、『最奥の地下水路』内を自由に動き回る。
座標は適当に言っている。

なんかカツコイイからな。

S・A「つと。着いた・・・へえ。」

敵5「・・・遅かったな。」

移った先には敵5が寸分違わなかったが、これは予想外だった。

俺が来るのを予期していたこと。

そして・・・。

S・A「薄暗い中でも映えるなその金。」

敵5「当たり前だ。」

悪魔の剣に纏わり付く金のオーラ。

召喚体を出しているあたり敵2より強い。

・・・が、有りがちだよな。

こういう奴について考えて、その後にそれくらいの強さの奴が出てくる。

S・A「有りがちだ。あははは、けどお前はダメだ。」

敵5「なんだと?」

S・A「意外と小心者なんだな。痛手150、負い目17。計18

50の死だ。」

敵5「な・・・に?」

この男の魂補充は543。

S・A「は。全然足りない。消えろ。」

敵5「ふざ

S・A「けてねえよ。」

敵5も消えた。

S・A「全く、面白みのない奴らだ。次は敵6、・・・確認。転移動作、座標542・356・852。」

・・・実際にこの座標を地球上で考へると何処になるんだろう。

S・A「・・・お、いたい。」

なにやつてんだ?

土下座?

S・A「なんとか崇拜とかそういう奴かね・・・おい!」

敵6「ひあつ!た、たすけてくれ!私は暗くて狭いところが怖いんだ!」

S・A「暗所恐怖症に閉所恐怖症ね。」

どつかで聞いたような恐怖症だなこれ以上はよそう。

S・A「ふーん。召喚体は使えず、痛手・・・おお539、負い目45・・・。」

一体こいつは何をやつてきたんだ。

S・A「計4839の死だ。まるで足りない。消えていいよ怖がらせて悪かつたな。」

さ、あとひ

「これもまた、お前の理解の中についたか?」

腹から突き出た剣先が鈍く光っている。

刺されたのか・・・。

S・A「ごふ・・・いや、想定外だ。『最奥の地下水路』内で俺が

死ぬことも、お前がここまで強さだったのもな敵。」

いつ現れた？

この中で俺に気付かれず背後に入り、剰え剣を突き刺すなんて。

・・・特性か？

AOF「AOFだ。ガブスとでも呼べ。」

S・A「ガブスね。大層な名前だこと。」

・・・痛手42、負い目7。

計742の死・・・だが・・・。

S・A「魂補充も大したもんだ。2874とか稼ぎすぎだろ。」

AOF「・・・引かれて2132か。恐ろしい特性だな『最奥の地下水路』は。」

S・A「・・・へえ驚いた。知つてんのか。」

AOF「ランキングは見たことあるからな。」S・A「あらら羨ましい。」

ランキングに入ってるらしい俺すら見てないと言つの！」。

AOF「さ、やるのかやらないのかどっちだ？・・・ははは。招いたのにこのまま帰す、なんて不躾なことはまさかしないな？」

S・A「当然。抹殺せずして此処から出すなんて沽券に関わるからな。」

AOF「はは。よろしい、では始めよ。」

一回殺しておいて始めるも糞もないと思つが。グロアディを『双頭』で一刀にしている。

S・A「いいなそれ。」

AOF「そうだらうとー。」

出現させた刀が弾かれる。

いくぞ・・・！

S・A「さつさと終わらせなきやならん。といつわけでさつさと死ね！」

転移動作、ガブス背後。

AOF「ぬ！」

ガブスの目の前から消え背後に転移する。

AOF「ぐあつー？くー？ー？」

一死・・・！

S・A「うわつと！」

右手で振るつてきたグロアーディをブリッジで避け、そのままバク転し正面を

背中に突起物の存在を感じた時、既に体全体に後ろへと行く力が回りきつており、それを止めるなど不可能だつた。

そしてそれは背中に突き刺さり、加えて腹を突き出てきた。つまり貫通した。

S・A「い・・・つて・・・。」

間抜けだ。

バク転したら背後にあつた剣が刺さつて貫通なんて。

AOF「間抜けだな水路。」

ガブスが背後に回つていた。

S・A「・・・は、ごほつ！なんで・・・。」

これまた間抜けだ。

敵に教えを講うなんて。

考えるんだ考える。

さつき俺を殺した時も俺の背後にいつの間にかいた。

敵の背後を取る特性・・・？

しかしこの広い地下水路内で転移動作を使わず誰かと会うのは、宝くじを3枚買って1等2等3等を1枚ずつ当てるくらいありえない。言わば奇跡が為せる技レベル。

そんな中で寸分違わず俺の背後に回る特性か・・・うーんありえない訳でもないが・・・。

AOF「どうした？傷は癒えたろ？便利だなこーは。死んでも魂補充があれば死んだ3秒後には傷は完治、すぐ動けるようになる。」

S・A「ふん。自分で言つのもなんだが所詮精神構造さ。こんな所で死んだ生きたなんて下らなさ過ぎて吐き気がする。」

ま、この中なら俺はチート性能持つてるからそういう点では好きな

んだけど。

奴の特性について大体の目星はついた。

後ろに気をつければなんとか・・・。

AOF「お前は今背後に気をつけつつ戦おうとしているだろ?」「S・A「・・・エスパーか?それとも頭の巡りはそれなりに良いと称賛してくれているのか?」

AOF「一つ目はまるで違うが、一つ目は若干違う。そう考えてくれてありがとうございます!」「

S・A「つまり、俺の予測は外れていると。」

AOF「いや、どうだらうな。ある意味正解ではある。」「そういう曖昧な返答は面倒だから止してほしい。」

S・A「・・・突然死。」

AOF「は!」

5本の剣を全て弾かれる。

転移動作ガブス背後。

更に、空間歪曲俺の背後を壁に。

S・A「!」

AOF「一度同じ手は詰まらんぞ!」

横薙ぎに振るつたグラムを跳躍であつさり躰される。

そのまま体を回転させ二刀のグロアティが俺に向けて振り下ろされる。

S・A「・・・空間歪曲!」

後ろを前へ、前を後ろへ。

俺がガブスの背後に立ち、ガブスは空間を切り裂いた。

着地したガブスの背に向け斬撃を放つ。

AOF「ぐお!つあ・・・!」

これは綺麗に決まり、右肩から左足まで切り裂いた。

S・A「ふおーいたそ!だけど終わりじやない!」

『追撃?』。

着弾した斬撃を更にもう一撃とする。

AOF「げああつ！？」

走った一閃の切り口から更に血が噴き出す。

これで二死、あと2130・・・！

S・A「ん・・・なんだ？」

何かおかしい、気がする。

AOF「・・・よくもやつてくれたな！」

傷の癒えたガブスが切り掛かってくる。

両手を大きく広げられ、左右に避けねば斬られそうだ。
ならうし

ドン。

S・A「な！？壁がなんげはつ！？」

腹を斬られた・・・！

AOF「ふ。『追撃？』。」

S・A「がつ！ごふつあ・・・。」

なんで・・・背後に壁が・・・。

『追撃？』により計4回斬られた俺の体が、上半身と下半身に分かれ地面に転がる。

AOF「油断大敵。干涉値が自らだけに振られた特技だと思わないことだ。」

頭に足が乗る。

まだ死なないのか凄いな人体・・・。

踏み潰す力の下、スイカが割れるが如く頭が散り、意識の最下層に叩き落とされた。

S・A「……う。頭いてえ……。
意識がしつかりしない。」

いや、『最奥の地下水路』を維持出来るからそうでもないか。
AOF「復活したか。さすがに頭を割られると多少時間が掛かるな。」

S・A「……当たり前だ。」

といつても5秒くらいしか変わらないけど。

S・A「ち、ストーカー野郎だと思っていたが全然違うようだな。
AOF「ストーカーなど行為に於ける一端に過ぎないというだけだ。」

S・A「つまり、ストーカー野郎で合ってるわけか。」

AOF「ストーカーの上をいくかもれないな。」

・・・死に死で返されたらたまたものじゃない。」

これじゃ俺が先にこの世から姿を消すことになる。

AOF「さあどうする水路。このまま一進一退し続けるか、それとも俺を解放して終わるか、どちらがいい?」

S・A「……お前を解放?」

AOF「ああ。確かに俺は今ガシフェロに仕えているが、そこに必要以上の忠義は立てていない。裏切るなら裏切る。ただし仲間でない以上それは裏切りではない。」

S・A「つまり俺を見逃してもいいってことか?」

AOF「そうだな。俺の“敗走”という形で終わらせても構わん。」

俺の目的はガシフェロカルテルを潰すこと。

こいつを殺すのは行き掛けの駄賃に過ぎん。
得られなくとも一向に構わない。」

S・A「……俺の出す条件に従えるならそれで手を打とう。」

AOF「ははははははは。」上で条件を出すか。いいだろ？聞くだけ聞いてやる。」

S・A「おまえは恐らく悪だ。外に出たとして、再び戦う確率が高い。だから、お前の特性を教える。」

AOF「なんだそんなことか。『劣悪盜撮奇行』。他人が起こした

一つの動作を丸々コピー出来る。ただそれだけの特性だ。」

S・A「動作をコピー？」

AOF「お前が使った、よく分からぬが位置を変えた動作を観測し、それをコピーしお前を壁の前に戻した。」

S・A「成る程。その動作の意味は分からなくとも同じ様に使える訳か。」

AOF「その通りだ。それが例え呪文だろうが、特性により引き起こされた動作だとしてもだ。」

空間歪曲をコピーしたから俺は元に戻ったのか。

AOF「一度にコピー出来る動作は一つだけ。上書きは可能だ。」

S・A「オーケー分かった。じゃあもう一つの条件だ。」

AOF「おいおい、ここまでばらしたんだぜ？これ以上なにをやらせる気だ。」

S・A「なに簡単なことさ。此処から現実構造に戻ったとき、死ね。そしてちゃんと過程を通して何処かに行け。」

AOF「・・・成る程。すぐ帰つてくるな、そしてメキシコに帰つてくるなど。」

S・A「そういうことだ。約束出来ないなら、突然死。」

黒い剣がガブスを覆う。

S・A「全力でお前を殺す。」

AOF「ははは。殺し尽くせないから俺の案に乗つたんじゃないのか？あははは、矛盾しているとは思わないか？」

S・A「倒せないとは言つていない。・・・此処に来てから既に1時間は経過している。便利な空間だが完全じゃない。時間は現実構造と同じ様に進んでいく。これ以上お前と遊んでいる時間はない。」

くー、これ言つてみたかったんだよ。

これ以上お前と遊んでいる時間はない。

ははは。

AOF「・・・何故ニヤニヤしているかは知らんが、いいだろ。此処から出たら殺せ。怪しむ必要はない。なんなら俺を縛り上げても構わない。」

S・A「気持ち悪いから止しておくれ。信じよ。」

『最奥の地下水路』、強制解放。

終わつていなが、スマン。

地下水路が体に戻つてくる。

瞬きしかけた時、世界が一変した。

AOF「瞬きくらいさせてほしかったな。」

S・A「せつかちなもんでな。」

AOF「まあいこや。さあ殺せ。わざとこのビルを爆破解体したいんだろ?」

シオンのことまで知つてたか。

何と言つかもう。

正面突破を切つたんだからワレラが入つてきたのは分かつて当たり前だが、二人とも素性が割れているとは思わなんだな。

S・A「ホント、この世界で有名人は損ばかりだ。」

AOF「ん?」

S・A「いやなんでも。一気にいくぜ、安樂死はさせられねえ。来い流星群。殺す殺す殺す。死の頌歌よ。貫き、拘束し。『千刃の谷・グラム』。」

AOF「本当は死の書で殺られたいが、約束は約束だ。あはははははははは。また会おう水路のさ

ビルの床が塵と化して舞う。

床を撃ち、埃を撃ち、ガブスを撃ち。

血の痕跡もなくガブスは抛り所へ消えた。

そしてまた世界の何処か、俺の知らない国に帰るのだらう。

S・A「奴が約束を守れば、の話だけ。」

ま、消えた奴のことはどうでもいいか。

『最奥の地下水路』に入つて今まで、さつさも言つたが大体1時間経過している。

シオンなら1時間もあればビルを制圧してそつなもんだが・・・。

S・A「うーん。考えるより先ず行動。案するより産むが易し。口

ハ丁手ハ丁・・・はちょっと違つか。」

さつさと上行。」

正面の階段でいいかもつ。

若干崩れている階段を上り、今度は正攻法で、お邪魔します。

○○モード切りじ。可愛こまかもなく

呆氣ない。

もつ最上階、つまり30階だ。

1階より上に戦闘の傷跡はなく、コピーペーパー紙が散らばっていたりはしたが血が飛び散っているということはなかつた。

つまりシオンは2階から此処にくるまでワレラと戦闘していない訳だ。

目の前には立派に見える扉が残っているだけだ。

此れ見よがしと掲げられているプレートを見なくとも知れることだ。

行くぜ・・・・!

S・A「ダラアー!」

扉を蹴破り中に入ろうとした。

S・A「つ・・・・引く、だつたか・・・・。」

改めてコンコンとノックし扉を引き、開け・・・・。

S・A「開かないやんけ。ああー引き戸なんだーー!」

この方程式はふる・・・・あれ?

奥に押しても手前に引いても右に引いても左に引いてもびくともしない。

なんだこの扉・・・・。

S・A「・・・・そつか分かつた。呪文だ。開けゴマ的な。所謂今最高にホットな声紋認識式自動デ開キマス扉だつたか。」となると困つた。

俺はそんな呪文しらな

「何やつてんじ」

S・A「Create剣!」

「のわつ!?」

背後の声に反応してCreate剣を投げつけてしまつたが、この声は。

SION「危なー。何してくれんねん。」

S・A「悪い。背後から声を掛けられるといつに殺意に芽生え、いや殺意を芽生えさせたくなるんだ。」

SION「物騒だな。あ、その扉はなんか有名なアーチストが創つたオブジェらしい。300万くらいやつて。」

300万に蹴りを入れたのか・・・快感。

SION「や、じつちや。」

シオンの背後、壁に黒い長方形が空いている。

これはスペイ映画とかにあるウイーン、ガショーンと上だか横だかに壁がズレるあれか。

・・・いや違うっぽい。

SION「俺は扉を閉めない奴は嫌いなんだ。ちゃんと嵌め込んでくれよ左宇。」

S・A「ああやつぱり。俺のワクワクを返せ。」
横に置かれた壁の一部を持つてシオンに続く。
よいしょと壁を嵌め込んで奥に行く。
そのまま歩かず目的の場所に着いた。

SION「あのがBAKA」とガシフロ・ボンバだ。」

ぶ・・・BAKAつて・・・いつのセンスだよ。

ん、そつちの名前があるつてことはこいつもワレラなのか。

BAKA「・・・お前ら一体何なんだ! いきなり俺の会社と倉庫をぶち壊しあつて! ふざけてるのか!」

S・A「ふざけてやつたにしちゃ悪戯で済むレベルじゃないと思うな。」

SION「その通りだな。」

BAKA「く・・・それをふざけていると云つんだー・目的はなんだ!」

S・A「おいおい、お前曲がりなりにもワレラなんだろ? なら分かれよ。咎人を殺りにきたに決まつてんだろ。」

BAKA「な、ならもう目的は果たしたろ! 出でけ馬鹿!」

SION「BAKAに馬鹿言われとうないな。ガスを止めたきや元栓を締めるしかないやろ?」この場合絞める、やけどな。安心せい。カニバリズムとかやないから食いはせえへん。」

S・A「お前の体は、だけどな。」

“千刃の谷・グラム”固定。

BAKA^{メディカーメン}「ひ・・・なんて言いつでも思つたか馬鹿めが!『抜け穴の埋まつた横道』!」

S・A「特性か・・・ん・・・?」

なんか、昔同じ様な感じに落とされた気が・・・する。

SION「んんん・・・なんやこれ? フラフラするやん。」

BAKA「ふはははははは! 馬鹿め! 『抜け穴の埋まつた横道』に嵌まつたが最後! そのまま麻薬に飲まれた様に死ね。ふははははははは!」

S・A「・・・・・そつか。」

BAKA「・・・え?」

思い出した。

俺が昔感じたあの浮遊感に、非常にムカつくが似ていたんだ。

S・A「世の中気をつけなきゃいけないことだらけだ。」

BAKA「何?」

S・A「何が人の逆鱗に触れるか分からんんだからな。悪いがシオン、こいつの始末は俺にさせる。」

SION「はあ? なんや知らんが別に構やせんけど。」

S・A「サンキュー。」

BAKA「だから一体なんなんだ! 俺も話にまぜザシユ。」

BAKA「・・・が、ぴゅ・・・はや・・・。」

S・A「喧しい。」

首を切り付け黙らせる。

S・A「安心しろ。此処で殺したんじや逃げられちまつ。そんな詰まらんことはしないや。じゃシオン、悪いが後は任せる。さつさと

爆破して構わん。」

S.I.O.N「オーケー。じゃあな。」

S.A「ああ。」
『最奥の地下
水路』、対象目の前のB
A
K
A。

行つちまいよつたな。

なしてあんなに怒つとつたんやろか。

うん、まあええか。

SION「ほな、さつさと爆破しまよかね。」

あ、そのまえに監視ルーム的などころに、ん、あ、此処にあるわ。社長室の隅に扉があり、そこを進むと監視カメラの映像が映されたディスプレイが大量にあつた。

SION「さ、館内放送館内放送。えーテステス。只今から爆破式を開催します。ビル内に残つてゐる人で、自殺志願者でない方はビルから出ることを推奨します。というか皆さつさと出ろ！死にたいなら一人で勝手に誰にも迷惑掛けない死に方を十分思案してから死ね。以上。」

では俺も下に下りようかね。

社長室の入り口を蹴り飛ばし、床に『火となり灰となれ』^{フォティア}_{スタフティ}を仕掛け
る。

“エクス”。

爆破し下に下りる。

それをどんどん繰り返し下に行く。

29階繰り返し1階に着くと、一人、眼鏡を掛けた奴がいた。

SION「おいお前、さつさと外出る。」

男「ひ！あ、すみません・・・。」

SION「あいつで最後かな」

先に出た男に続き外に行く。

SION「新西市以来の大仕事やね。ほなさいならガシフェロ・ボンバの要塞ちゃん。“エクス”。

ボンツ。

一階に仕掛けた『火となり灰となれ』が全て起動した。

「アアアア」と音を発て崩れていいく。

男「ひあわあ！？」

情けねえっと。

男にぶつかる予定だつたであらう巨大な瓦礫に触れ灰化する。

そのまま灰を“ソードフィッシュ”で撒き散らす。

ふー俺カツコイイ！

SION「よーほーとやあ！はー！」

他のビルに飛び散る破片をCreate剣を投げつけ爆破したり、“千刃の谷”、“ソードフィッシュ”を駆使し撃墜したり、直接触り灰化せることで被害を消す。

SION「お、こりや完全に想定外だ。」

工場部分3階が丸々落っこちてきおつた。

男「うひえあわ！もうだめだ！」

SION「喚くなや喧しい。輝け魂。昇華に継ぐ昇華。神聖の下に更なる誓いを。“サブゴッド・オブ・リメイション”。“千刃の谷”×3固定。“ソードフィッシュ”右手集中。“スレイ・ライ・サントエク”左手固定。」

足に力を纏め飛び上がる。

先ず“ソードフィッシュ”を直に叩き込み工場1階を細切れにし、更に“ソードフィッシュ”に掛けた『火となり灰となれ』を解放。

1階部分は塵と化し地面に降り注いだ。

SION「あーあかんやん。落ちてくるスピード早すぎるわ。これじゃ見せ場も糞も無いやんけ！」

工場を下から思い切り蹴りあげる。

SION「よつしゃー本気だすで！」

左足は潰れたがまあしゃあない。

俺の見せ場はここだけなんやー！

“千刃の谷”×3固定解除。

下から“千刃の谷”で追撃を仕掛ける。

3千の刃が床であつたであろう部分に突き刺さる。

SION「エクス」。

2階部分完全破壊。

ラスト・・・ヒー！

落ちる瓦礫を上手く足場にして（出来るとは思つていなかつたけど結構普通にいてビビッた）飛び上がつていたが、瓦礫無くなりよつて勢いも無くなりおつたわ。

SION「仕方ないわ」。“グール・ジフ・リートシズク”。

ジ「主よ！」無沙汰

」

SION「挨拶なんてどうでもいいから俺の足場になれ！」

ジ「ぐはっ！？ そんな久しぶりなーの一にー！」

スマンなジーク（心にも思つてないけど）。

SION「よつしゃラストかつちよよく決めるで！」

左手に溜めた“スレイ・ライ・サントエク”を解放。

SION「エクス」！

と同時に『火となり灰となれ』を解放。

音もなく、いや、大きすぎて逆に聞こえていいか。とにかく工場3階部分も灰燼と化し消えた。

SION「イエス！」

そして俺はそのまま落_下し全身骨折した。

SION「いつてー。しかし、見せ場はちゃんと作ったで多分。」

男「だ、大丈夫ですか？」

SION「・・・阿呆。いくらワレラ言うても人間の体と大差ないねんてなんでお前俺のこと見えるん。ワレラだつたんか？ だつたら助ける必要なかつたな。」

男「い、いえ違います。しかし、よく喋りますね貴方。死にかけとは

SION「じゃあなんで俺のこと見えるん。」

男「ここは私の見せ場でもあるんだから切らないで下さい・・・。ネタバレするとですね、この眼鏡のおかげなんです。」

SION「は・・・ここで眼鏡の謎が解けるんかい。」

男「実はですね・・・」
はいここまで。

どうせ左字にも説明すんねん。
纏めて言わせてくれや。
わざわざに分かるやうつけどな。

ヒューローク・一回別れよう。俺は戻る・

不快者以来の胸糞悪い奴だった。

魂補充は殆ど無かったが、痛手や負い目になつたりすることを、奴は喜びとして受け止めていた。

仕方ないから573あつた魂補充を全て俺の手で消してやつた。ま、おかげでグラムをLV16、新しく覚えた“デュランダル”をLV18に出来たけど。

・・・これについてはもう忘れよ!つ。

奴は死んで次の外枠に嵌まる。

ただそれだけだ。

S・A「・・・にしてもビビッた。確かに爆破したのは俺だが、いやいや。」

『最奥の地下水路』から出ると、150mからの自由落下に移行した。

覚えたての“サブゴッド・オブ・リメイション”を使い、“千刃の谷”を下に撃ち込み勢いを無くす事でなんとか怪我することなく着地出来た。

S・A「それでだ、なんで俺は怪我なく此処にいるのにお前はボロボロなんだ?」

SION「・・・ああ。来たか。よつと。」

シオンの格好は酷いもんだつた。

服は所々焦げ破れ血がこびりついている。

SION「一回死んだんだ。けどよくやつた感は残しそきたかったから服は変えなかつたんだ。」

S・A「そうか。まあ何でもいいけど。」

SION「や、良い知らせがあるんだが、聞きたいか?」

S・A「悪い知らせがないなら。」

SHON 「知つて損はせえへんと思つて。眼鏡の」じゅ。「」

懐かしそ響きとはこのことか。

S・A 「やつぱりフレラと一般人の区別か？」

SHON 「まあそれも間違いやなにんやけどな、もつと驚きの

」

S・A 「フレラが見えるとか? 当たりか? 当たりだろこれ..」

SHON 「お前ふぞけんなよおおお?..そにはや、全部聞いて“なんだと?”か“なんだつて!”って言つといひやつ?」

S・A 「ああ悪い悪い。でも大体予想出来たからな。俺手より足より口のが速いんだ。」

SHON 「くそがー! 今回最後の見せ場だつたのによ。」

S・A 「まあまあ腐るなよ。お前とはまた何処かで会つや。」

思わせぶりな握手もしたし。

SHON 「あれ? なにもう閉めようとしてる?」

S・A 「ああ。俺はまた拠り所に戻らなきやならないじつ。」

SHON 「ええか。俺は残りを潰したらじつから出てへつもつや。せつじつと差し出される右手。

SHON 「お前とはまた何処かで会いたいな。」

S・A 「・・・ そうだな。」

出された右手を、同じく右手で受けける。

S・A 「俺としては新西市で会えると助かるな。」

SHON 「新西市やて? なんでや?」

S・A 「おつと時間のよつだ。謎は残しつつ、名残は残せんがほなさいなう。」

拠り所へ。

SHON 「ちよつと待ちい自分でー・・・ 行つてもうつたわ。一体なんやねんあいつは・・・。」

こつして一つ目の旅は終わりを告げた。
なかなか面白かったぜ。

またいづれ会おう。

爆破工とSITHON。

ある国の人々は悲劇を見るのが好きだ。

何故好きかと言えば、それを見て愉悦に浸れる自分を素晴らしいと感じるからだ。

詰まるところ、見下せるから好きなのだ。

他人が悲しみ悲壮感に打ちのめされ叩き落とされる様を見て、泣く自分に酔うのだ。

それが同情に依るモノだと尚更だ。

悲劇と喜劇の違いは何だろうか。

悲しみがいつも辛いことだと限らないよつこ、喜びは辛いこともある。

そして私にとつてはどちらも至上の満足に繋がる劇に過ぎあん。

この街は舞台、演出は私わたくしこと“偏屈王”。

出演は君達“一般市民”だ。

沸かせたまえ私だけを。

Where is here ?

はい、やつてまいりました此処は何処でしょうか。

ええ、メキシコに飛ばされた時同様教えてくれませんでした。

〇Ｚの野郎は俺に恨みでもあるのかね。

メキシコでシオンに別れを告げた直後廻り所に飛び、〇Ｚの部屋に入つた。

瞬間“行つてら”と一言掛けられたかと思つたら既に此処にいた。行つてらつて、ネトゲじゃねえんだから。

まあいい・・・此処が何処なのか考えるのが先決だ。だが、考える必要はあまりないかも知れない。すぐそこに看板があるし。

S・A 「“ウエルダンシング”・・・？」

聞いたことない。

俺は地理に疎い。

英語圈ぽいのは分かるが・・・。

取りあえず飯でも食おうか、つて金が・・・ん？

ズボンのポケットに何か入つてゐる。

S・A 「これは・・・50?50・・・ポンド。ポンド・・・昔よ

んだ誰んかの小説に出てきたな。」

けどあれは住んでる地域とか隠してた氣がする。

S・A 「まあいいや。取りあえず飯だ飯。誰が逃えたか知らねえがちょうどぢやちな喫茶店がある。俺も思わず説明口調になつちまうよつな喫茶店だ。」

名前は、“LIFE”ね。

どつかで聞いたよつな名前だが気にしない。

カラソコロソと扉をくぐり中に入る。

中には客二人とマスター一人だ。

カウンターに座り、メニューを開く。

S・A「んー・・・あ。・・・取りあえずコーヒーとトースト。ステイックシュガー一本とミルクをつけてくれ。」

マスター「あいよ。」

・・・ただの先入観で、いや偏見と言つたほうが当たつてゐるか、実際にそつかは知らない。

メニューに一つ、ここが何処だか分かる食べ物が載つてゐた。いや、レストランとかファミレスならありそうだが喫茶店にあるのかなあ？

適當やつてないか？

魚だかチップスだか・・・。

客1「今日は雨になるそつだな。」

客2「らしいな。おとといは酷かつた。晴れだつつてたのに朝から雨だつたからな。」

・・・ああ、多分確実だ。

マスター「あいよ。コーヒーとトースト。ステイックシュガー一本とミルクお待ち。」

S・A「どうも。ついでに新聞見せてくれない？」

マスター「あいよ。」

S・A「どうも。」

突然だが俺は食パンの一一番端が好きだ。

パンの耳が下にもあるタイプつてことな。

あれは市販の食パンだと入つてないからちよつと残念なんだ。あれだけ入れて6枚切りとかで出してくれば買うのに。邪道かな。

パンの耳を食わない奴つてなんなんだ？

サンドイッチ気取りか？

それとも取らなきや食えねえ程我が國の民の歯は弱つちまつたのか？あとレーズンロールパンからレーズンを掘り出す奴。

そこまでするなら食うな俺にくれ。

S・A「・・・ん？なんじやこりや？」

“今日の遺体写真”？

自慢じゃないが俺は基本的にテレビ欄しか見ない。

他はテレビ欄裏の四コマと科学やら化学やら生物に関することしか見ない。

今日の遺体写真は我が国だとテレビ欄がある面に掲載されていた。

つまり一番最後だな。

S・A「珍しい記事だな。・・・あまり気持ちの良い記事ではないが。」

ナイフで死んだ子供。

窒息死した子供。

10階から転落死した大人。

溺死した大人。

などなどetc。

全部おかしいと言えばおかしいが、この“溺死した大人”は際だつておかしい。

どうやつたら周りに水のない道路の上で溺れ死ねるんだ？出来ればやつてみたいからコツを教えてほしい。

S・A「ちょっとといいかいマスター？」

マスター「・・・何でしよう。」

S・A「この、今日の遺体写真つてのはなんで掲載されているんだ？」

マスター「・・・この辺りの人間が悲劇を好むから、じゃないんですかね。」

S・A「そんな理由で死体の写真を載せるのか・・・。」

家族はよく了承するな。

マスター「まあね。毎日載るから、たまにどうかと思つ写真はあるよ。」

いや、そういう問題ではなくてだな。

S・A「俺はもっと根本的な所をどうかと思ってるよ。・・・ちょっと待て。これ地方紙だよな？」

マスター「ああ。」

S・A「この街、えー、ウェルダンシング？は一体どれくらいの広さなんだ？」

「コーヒーカップを磨くマスターがこいつらを一警し、再びコーヒーカップに目を戻し言つ。

マスター「あんたの国に京東つてのがあるだろ。あれの半分くらいだ。」

S・A「京東の半分だと？」

ということは人口も知れてる筈だ。

S・A「この写真は皆この街の物なんだよな？」

マスター「そりや地方紙だからね。」

S・A「いつも何枚くらい載る？」

マスター「・・・最近だと平均10枚とかですかね。」

ということは毎日大体10人ずつ死んでいるのか・・・。

人口逆爆発してもおかしくないペースだ。

そして咎人が増えるペースも恐ろしく早いはず。

これを見た限りじゃ殺人ばっか、てわけでもなさそうだが。

S・A「・・・ごつそさん。」

マスター「お粗末さま。」

S・A「つと、そうだ。最後に聞きたいんだが、この新聞の出版社は何処にあるんだ？」

マスター「・・・」こを出て最初の角を左。そこから更に300m歩いて角を右。ヴェリテ・ラコンテって名前の出版社がそうだ。」

S・A「サンキュー。はい勘定。釣りはいらねえぜ。情報料込みだ。

」

言つてみたかつたんだよこのフレーズ。

カウンターに皺くぢやの50ポンドを置き店を後にする。

シャツの胸ポケットから煙草を取り出し口に啞える。

S・A「“我是成しゆ。我を成す”。“シュレイ・ライ・シャントエク”右手固定。」

右の人差し指を煙草の先端に軽くつけ火を灯す。

S・A「すー・・・ふー。我は成しゆでもいけるのかよ・・・。」

・・・50ポンド様々だ。

S・A「ふー。ま、何にしても取りあえずやるべきことは決まったな。」

目指すは、えー、ヴェリテ・ラコントだ。

“ヴェリテ・ラコンテ”、此処か。

別段特徴の無い建物に掛けられた、これまた特徴の無い看板がそれを教えてくれる。

外観だけじゃ変わった様子は見られないな。

今、ヴェリテ・ラコンテの真ん前にあるベンチに座り周りを眺めているが、なんだそれなりに活氣がある街じゃないか。人の往来はなかなか激しいし、道幅は広く街灯やら木やらもそこら中にぽんぽんある。

これなら人口逆爆発の心配もないわけか。

だとしてもあんな写真を新聞に載せるなんざおかしいが。

こりや、恐らくフレラが一枚も一枚も、いや十枚は噛んでやがるな。となるとだ、ナイト化して中を調べるなんて迂闊なことやつたら即ばれるだろう。

それにだ。

S・A「・・・此処に着いて30分経つたが、5人か。」

気になるのは眼鏡を掛けた奴らだ。

メキシコのガシフェロ・ボンバカルテルに居た眼鏡達。

あの眼鏡はフレラを見ることが出来る物だった。

別に見られたところで大して問題はない。

そいつが俺を殺すような奴じゃなきゃな。

だが気になるもんは気になる。

S・A「ま、取りあえず会社の位置は確認できた訳だし、次行きま

すか。あー、エクスキューズミー?」

男「ンー?なんですか?」

S・A「図書館は何処にありますかね?」

男「図書館ならここをまっすぐ1km程行けばあるよ。」

S・A「そうですか。ありがとうございます。」

男「・・・」

S・A「ん?」

道を教えてくれた男が黙つたまま右手を差し出してきた。

S・A「・・・あの?」

男「・・・」

更についついと右手を出してくる。

もしかして、チップとか?

いやいや、いくら外国つつてもさ。

道聞いただけでチップねだつてくるのは、言つちゃなんだがルンペンプロレタリアートかストリートチルドレンくらいだな。

目の前の男はスーツをピシッと着込み、右手にアルミのブリーフケース、所謂アタッシュケースを持つた如何にもな男だ。

そんな奴が道を教えたくらいで執拗にチップをねだるか?

男「・・・」

尚も男は催促してくる。

S・A「・・・ハイメン。言いたいことがあるなら言つてくれよ!」

You are blocking the way! アーハン?」

男「・・・」

もういい。

S・A「“我は成す我を成す”。」

ナイト化し、近くの屋根に飛び乗つた。

男「タエキダンナ!? ウロヤ、ノアタッガヤキイ、コドウショクチ?」

男はなにやら喚いているがまあいいだろ?。

S・A「一体なんだつたんだいつは。大体チップなんかねだられても金持つてないつづーの・・・おつと!」

平たい屋根に這い蹲う。

ヴェリテ・ラコンテから誰か出てきやがつた。

「何を喚いているんだいジョース?」

男「シンジ! 聞いてくれよ、さつき君の国の奴に道を教えたんだ。

それなのにチップをくれなかつたんだぜ？」

シンジ？「なんだそんなことか。私の国ではいまだにチップは普及していないんだ。許してやつてくれ。」

男「・・・まあ君がそういうなら。」

シンジ？「ありがとうジヨース。いやはや、それにしても私がいて良かつたよ。誰とも知れぬ同郷の友のせいで、私の国の品位を落とされる所、だつたのだからな。」

悪うございましたねムカつく野郎だ。

シンジ？「それにしてもジヨース、君が取り逃がすとは余程の逃げ足の持ち主だつたんだね。」

男「いやそれがさ、目の前に居たんだがスッと消えてしまったんだ。」

「シンジ？「消えた・・・。」

S・A「つ！」

覗いていた顔を見えない様隠す。

・・・あの野郎、俺の方をはつきり見やがつた。

ハハハとシンジと呼ばれた男の笑い声が聞こえる。

シンジ？「ハハハハハジヨース、もしかしてそれは君、白昼夢だつたんじゃないかい？」

男「そんな馬鹿な！今日はヤクを何もキメてないぜ？」

・・・なんだと？

シンジ？「ふーむ。君が最近使つてたのは何だつけ？」

男「へ口だよ。」

シンジ？「ならそろそろMDMAにでも変えたらどうだい？たまには人工的なヤクも摑つてみな。案外イケるよ。」

男「そうかい？」

おいおい、天下の往来で話すような「太じやないぞ。ヤクがどーだキメたがどーだなんて。

さつきのチップ催促と言い今のは会話と言つておかしいぞこの街は。

・・・いや待て俺。

一を見て十を知つた氣になつちゃいかんか。

シンジと男はヴェリテ・ラコンテの中に入つてしまつた。
S・A「・・・よし、いなくなつたことだしさつさと図書館に行こ
う。」

・・・図書館ではチップを要求されないことを祈るばかりだ。

幸いというかなんというか、チップは要求されなかつた。借りたのは過去3年分のヴェリテ・ラコントだ。

借りたのは過去3年分のヴェリテ・ラコンテだ。

新聞の名前と会社の名前を一緒にするたあ、賭けてるね。

S・A「さ、見るのはテレビ欄だけだからちやつちやと済ますかね。」

先ずは今から3年前、2100年4月3日からだ。
量から真變成つこみー。

道徳實驗の書

次
第
00
年
4月
1日
なし

S . A 「お！ きたな。

「写真は載つていなかつた。」

死因と死後ご両の名前が書いてある「ジナ

復讐の列ノ嘉ニ依る夫血死。

此圖亦極難圖之，以爲

名前は
・
・
・
“
S H I N J I
”
。

シンジ?

聞いたような名前だ。・・・ああ、あの出版社の男か。

アリーナ最初の“物語者”で、この力

自作自演が二枚の手作に差し加えられることで、力がかかる。

前番たどして 何苦そんがことをじか

二の時点で奴が既にハントになつてゐるとは限らんか。

大体、奴がワレラだという裏付けはない。

確かに奴は俺の方を見たが、たまたまだというのも捨てきれない。

ザ・サaintロス。性別女。死因は・・・は？窒息死・・・。
窒息死なのは良いが、いやまあ良くはないが、“息の止めすぎ”による窒息死ってのはどういうことだ？

年齢は9歳、友達とどちらが長く息を止めていられるかを競い、競い過ぎた結果死亡。

なんとも間抜けな死因だ。

友達については何も書かれていらない。

S・A「んー・・・4月5日、写真無し。名前、シーナ・テレス、性別女。カリムラ・コウナ、性別女。テーゼスター・ストルクム、性別女。死因は・・・はー・・・。」

転落による脳挫傷ね。

年齢は皆7歳。

入学式の翌日、皆で屋上から飛び降り。

頭から落ち、脳挫傷で即死。

S・A「4月6日、写真無し。名前、セルサ・ストルクム、性別女。テーゼスター・ストルクムの母親ね。娘が死んだ翌日に死亡したあ後追いとしか思えんな。」

ほれ見る、死因は睡眠薬の過剰服用だ。

これはさほど面白くないな。

S・A「4月7日、写真無し。・・・写真無しは飛ばそう。」

ペラペラペラ。

ペラペラペラ。

S・A「・・・お。きたきた。えーっと、7月7日、名前はカラミラ・フース。性別女、年齢17歳。死因は、一周回ったな。」

腹部刺し傷に依る失血死。

遺体の写真もちゃんと載っている。

今日喫茶店でみたヴェリテ・ラコンテは、カラーで掲載していたが、この頃はまだ白黒だ。

とは言えショックキングな写真に違ひはない。
よく掲載許可がおりたな。

S・A「次、7月8日、名前はバシリナ・ルクス・ダルディーノ。

性別男、年齢57歳。今まででいつもちゃん歳くつてるな。」

死因は溺死。

そういうや今日見た写真にも溺死した奴がいたな。

あつちは道路で溺死だつたが、こつちは車内で溺死ね。

最早ホラーだ。

S・A「次、7月9日、名前はゾルディス・ケネスコス。性別男、

年齢23歳。死因は・・・失血死。」

出血は股下、といつても股間じゃない。

太ももの付け根、と言えばいいのだろうか、両太ももの付け根が裂

け、そこからの出血に依り死亡だそうだ。

何故裂けたかと言えば、まあ端的に言えば股を開きすぎたからなん

だが。開いた理由が“友達とどちらがより股を開けるか競つた”からじ

い。
どうかで見たような理由だ。

S・A「友人は器械体操の選手だったので無傷ね。勝てるわけねえ

だろ何でやつたんだこれ。」

あかん、股が痛くなつてきた次いこう。

S・A「え、えーっと、7月10日、名前は・・・なんだと?」

“SHINJI”?

何でまた死んでんだよコイツが。

年齢28歳、死因は一酸化炭素中毒に依る心肺停止。

・・・一体何故だ。

さつきの“SHINJI”とこつちの“SHINJI”が同一かは
分からぬが、街で見た“シンジ”と呼ばれた男とこつちの“SH
INJI”的顔は似ているように思える。

S・A「やはりあいつはワレラか? としてワレラが自殺?」

有り得ないことではないかもしね。

そういう事象は確認したことがないが、慣例にしても最初は“有

り得なかつた”ことを“有り得、常に行つが普通”なことに変えただけなんだ。

いきなり例外に当たるなんて別段驚く」とじやない。

地震は予期せずともやつてくる、詰まるところそういうことだ。

S・A「・・・ま、何にしても自殺なんて詰まらんな。次いこ。」

カラ一まで飛ばそう。

・・・・・。

S・A「お。2102年12月31日。年の暮れにも死者たあうまくねえなあ。」

名前はイペンシュ・トウカ。

年齢18歳。

性別女。

死因は凍死。

作つていたかまくらが崩壊、そのまま雪の下敷きに。そしてそのまま凍死へ、ね。

人が埋まる規模のかまくらを一人で作つていたとは思えない。一緒に作つていた奴は死ぬまで放つていたのか？

それなりに面白くはあるが・・・って、え？

S・A「俺は・・・一体何を言つてゐる？面白い？」

人の死が、咎人でもない奴の死を面白いか面白くないかの秤に掛けているのか？

そんな、不快者がやるような事を俺はしたのか？

S・A「・・・ツ！ふざけるな・・・俺はあいつとは違う。真逆に立たなきやダメだ！」

司書「あのー・・・。」

S・A「なんでしょうか？！」

司書「図書館内ですのでお静かに願います阿部左宇様。」

S・A「あ・・・すみません。」

つい頭に血が上つてしまつた。

司書「いえ。それと忠告です。いくら貴方が11位とは言え一介の

フレラとセリして違いはありません。あまりガーリテ・ラゴンテを読み込むと、墮ちますよ。」

S・A「ああ、こりゃ親切にどつも。」

司書「・・・あの。」

S・A「ん? まだ何か?」

司書「いえ、驚かないなーと思つて。」

S・A「ふん。いくら俺がビックリ症候群だっていつてもいい加減なれたよ。」

司書「なんだー残念。」

いきなり馴れ馴れしくなった女司書が、椅子の背もたれの上を前宙で飛び越え華麗に着席した。

S・A「ウルトラCだな。満点。」

司書「どうもありがとう。君は私のこと知らないの?」

S・A「残念ながら君みたいな美人と会つたことはないよ。いや、喜ぶべきかな。今まで知らなかつたおかげで、初々しい君の仕草を見られるんだから。」

司書「え、なに君そういうキャラなの?」

S・A「いんや。なんか言いたくなつただけ。で、あんた誰だ?」

司書「一応ランキングにも入つてるんだけどな。17位だけど。」

S・A「悪いが俺ランキング見たことないんだよ。」

司書「えーそうなんだ。0%に言えれば簡単に見せてくれるよ。」

S・A「今度頼んでみるよ。それで?」

NiNgo「もー仕方ないなあ。私はNiNgo 中田と呼んで頂戴な。」

やつぱり知らん。

S・A「聞くが、お前は〇か カ。まさか×とは言わないな?」

NiNgo「不快者と一緒にされちゃ堪らないわ。私は ね。偏り過ぎるのもどうかと思うから。」

S・A「そうか。あんたはいつからこの街に?」

司書なんてやつてるとこを見ると結構長そうだが。

『Inogu』2102年7月8日から。』

S・A「せりや結構長いこと……7月8日と並べば、溺死者が出た日だな？」

『Inogu』んふ。『言つてなかつたつけ？私は溺死。『パゴ』リムニ『アトスイ』水面に落ちろ』。

S・A「つーやめりー。」

白い、目に見える程の冷氣が体を包んでいく。別に恐怖してやめらなんて言つたわけではない。戦う気がないから言つただけだ。

S・A「く・・・。一体なんだ！」

足元がつるつるする。

靴を、靴下を通過し足の裏に縛り付けられるような冷たさを感じる。『Inogu』『じうかしり？』『凍える寒さの水面に落ちろ』の冷たさは。『S・A』「じうこいつもりだ？俺はな、寒いのが嫌いなんだよ。それこやぶつ殺したくなるくじこな。」

『Inogu』あら残念。』

どうやら、湖の表面に氷が張つていてその上に俺達は立つてゐるらしい。

一面白く、遠くの方には雪山も見える。

『Inogu』氷はそんな簡単に割れないから安心して。別に君を殺したい訳じゃないんだから。』

S・A「もしそうだとしても叶わん相談だよ。」

『最奥の地下水路』は使えそうだからな。

『Inogu』『だつて一君が私を知らないつて言つからー。教えたげよと思つたんだよ。』

S・A「口頭で構わないだる。』

『Inogu』『それにもうちょっと忠告したばよと黙つてね。』

S・A「何？』

『Inogu』『街は確かにおかしい。何故ならおかしくしてゐる奴

がいるから。でも私じゃないよ?」

S・A「それは何となく分かる。」

Ni ng「ヴェリテ・ラコンテに目を付けたのは良い勘してると言えるよ。それが“偏屈王”の先入観を蔓延らせているんだからね。」

S・A「たまたまなんだけど読んだのは。その“偏屈王”ってのは何なんだ?」

Ni ng「名前みたいなもんよ。シンジ、君も見たと思つけど、ヴェリテ・ラコンテに載つた最初の死亡告知。そしてヴェリテ・ラコンテの記者、といったとこかしらね。」

やつぱりあいつはフレラだつたか・・・。

Ni ng「奴の特性は分からぬしあまりハッキリもしないんだけど、恐らく人の先入観を書き換えるモノなのよ。」

S・A「先入観の書き換え?」

Ni ng「君、さつき遺体写真を面白いか面白くないか見てたでしょ?」

S・A「・・・それは、確かにそうだった。」

最初の内は純粋に調査だけだったが、途中から面白いとか面白くないとか考えはじめていた。

Ni ng「ヴェリテ・ラコンテは片面20頁。偏屈王の先入観が5%ずつ頁に練り込まれているとすれば?」

S・A「・・・?すれば?」

Ni ng「ちゃんと最初から最後まで読む人は遺体写真の面を見た瞬間100%偏屈王の先入観に飲まれる。」

S・A「・・・成る程?」

Ni ng「意味分かつて?」

S・A「まあ大体は。」

Ni ng「じゃあいいわ。君は遺体写真の面だけ見ていたから飲まれるのが少し遅かったのよ。しかも途中から飛ばしてたしね。」

S・A「・・・その先入観は取れるのか?」

Ni ng「ええ。確かに強力な書き換えではあるけど、先入観つて

いうのは元々は有り得なかつたことなのよ。それが、長い年月を掛けて形成され刷り込まれる。そして次の代からは“先入観”として学習することなく馴染んでいる。記憶と一緒に短期刷り込みが何度も繋がつて長期刷り込みになる。だから君は先入観を取り戻してるよ。」

そりや良かつた。

最低の先入観だつたからな。

Ni ng「でも同じ先入観は刷り込まれやすくなるから気をつけてね。ヴエリテ・ラコンテはこれ以上読まない方がいいわ。」

S・A「忠告どうも。だが心配ない。偏屈王だかなんだか知らんが、此処から出たら直ぐに倒してやる。」

今回の標的はあいつだ。

Ni ng「簡単にいくといいけどね。」

S・A「・・・どういう意味だ？ 強いのか？」

Ni ng「ああ？ 残念ながら分からぬの。」

S・A「戦つたことがないのか？」

Ni ng「いえ。あると思うんだけどね。」

S・A「成る程。それも先入観の書き換えとやらでハッキリしないのか。」

Ni ng「いいえ。」

S・A「は？ つまりどういうことなんだ？」

Ni ng「シンジはこの街に1000人はいる。・・・お約束ね。」

話の最後にそれなりに衝撃的事実を述べる。ではでは、次のお話で会いましょう

Extraimonibaker? ふざけんなよ！ -

「Arkbank extra was Ning春日井田川野々山
戸倉黒沢dogce。X西川野々山水無月」・A5松本EU／松本
SION田川。」

「そうか。報告」苦労ArkC。引き続き対象Steinの監視を
続ける。BankC、ComedyC、DustC、ExtractC、
FishC、並びにGateC。それぞれ現在地を報告しろ。」

「Bank、ウエルダンシング春日井羅列平内AOFSION西川
treeghzerzero。所用時間sixerzero。」

「Comedy、西川SION西川oneezerzero。所
用時間twonazer。」

「Dust、西川SION西川fiverversixerzero所用
時間twonazerzero。」

「Extra、fish大城吉原Ve.IEgate戸倉合同。水
無月Ning水無月西川oneeffiverzerzero所用時間fo
urxzero。」

「Fish、S.A杵築西川大城Ningedia。」

「Gate、大城Ningedia黒沢。」

「了解した。各自ウエルダンシングに着き次第Arkと合流しろ。」

S・A「一体どういう意味だ？」

阿呆みたいな事実だ。

あの男が1000人いるだと？

N i n g「1000人くらいね。もしかしたらそれ以上かも。」

S・A「なんだそれ。一体どうやつて確認した？」

N i n g「私も遊んでた訳じゃないのよ。何回か偏屈王を殺そうとはした。けどね、いざ殺す段階になると“俺がシンジだ！”、“僕がシンジだ”、“僕がシンジじや”って周りの人人が言い出してね。果ては女性までもが“私がシンジよ”なんて言つのよ？私自身がどうかなつちゃつたのかと思つレベルよ。」

S・A「…それも先入観つて訳か。」

N i n g「そうかもしれない。」

S・A「？」

N i n g「もしかしたら、私達もただの先入観なのかもね。」

S・A「なに？つ？！おい！」

冷氣が吹きすさび中田を包んでいく。

N i n g「これ以上は自分で考えてちょうどいい。さつきも言つたけど、私は寄りすぎるのは好きじゃないの。」

S・A「く・・・待て、うわっと！？」

中田と俺の間に亀裂が走る。

N i n g「水に触らないようにね。引きずり込まれて死ぬよ。」

S・A「なんだそりや！？くそ・・・待てよー。」

N i n g「気をつけて調べなよ。じゃなきゃ君も、この街に飲み込まれるから・・・。」

S・A「お、ちつ！」

方々に亀裂が生じ、氷の大地が沈みはじめた。

S・A「触らないようにって、こりゃ無理があるぜー。」

亀裂が追つてくるので取りあえず逃げているが、『凍える寒さの水面に落ちる』が解けるまで逃げられるのか？

S・A「仕方ない……！『最奥の地下水路』。」

踏み締めていた氷が、煉瓦造りの大地に変わった。やつたことはないが、やらなきや死んで魂を無駄にする可能性があるからな。

S・A「……転移動作、座標0・0・0。始点へ。」

入口があれば出口があるように、出口があれば入口がある。この空間に限れば、出口は無数だ。

どこからでも出ようと思えば出られる。

ただ、入口はたつた一つしかない。

『最奥の地下水路』を使った瞬間に、始点である0・0・0から入り、そこから瞬時に広大な地下水路内の何処かに移される。入口に行く理由は一つ。

やつたことはないが、入口をずらす。

ただし現実構造の入口をだ。

『最奥の地下水路』を解いた場合、基本的に使った場所に戻される。が、今は現実構造の入口を弄れる様になつたので戻る場所を変えられる、はず。

『最奥の地下水路』は経験値を積んでいる。

ここで殺した魂の数だけ、俺達の様に進化していく。

前回糞野郎を殺つたおかげでこれが使える様になつたみたいだ。

S・A「……着いたか。」

入口には扉が設置してある。

扉と言つてもかなり簡素な物だ。

鉄板に指紋認識式自動開閉錠が付いているだけ。

ここから出たことはないから何故こんなモノが付いているのかは分からない。

いや、そもそもコレが最初から付いていたかどうか分からぬ。

S・A「まあなんでもいい。……現実構造透過”倍率一次元。」
目を閉じると、入口の“外”、つまり扉の向こう側にある現実構造
が、二次元の情報で飛び込んできた。

S・A「……おいおい。あいつ最初から俺を殺す気だつたな。」

見えたのは、全ての氷が消えた湖だつた。

S・A「美しい水面だこと。・・・ふー。現実構造座標・・・なん
じやこりや。意味分からんが、ずらしすぎればどうなるか・・・。」

海に落ちたり、つてどこかな。

S・A「まあなるようになるか。現実構造空間歪曲、更に現実構造
転移動作、座標・・・ちょっと右へ。」

『凍える寒さの水面に落ちる』は恐らく空間転移特性。

となると事象の境目は中田から5m程。

俺が奴の特性に巻き込まれた時の状況を思い出してみる。

確か俺の右にはそれなりに空間が空いていた。

一人だけ離れたところで読んでいたからな。

S・A「・・・本当は、現実構造透過で外を見たいが、如何せん無
理をしがたかな。疲れた。」

空間転移特性からの特性重ね、それに加え自分だけ取り込むという
徒労行為を地下水路は許していない。

庭みたく使える様になつたとは言え、それも他人を引きずり込まな
ければ意味がない。

若しくは俺一人で入りゴロゴロするだけならいいんだが。

S・A「悪いな地下水路。次は敵を連れてきてやる。」

返事なんてあるはずもなく。

指紋認識式自動開閉鍵に人差し指を押し付ける。

電子的な、如何にもな音が静寂に満たされた地下水路に響く。

S・A「・・・さあ行くか。出た場所が湖の上だろうが本の頂上だ
ろうが漆喰の中だろうが恨みはしないさ。」

鉄板扉が音は無いが重々しく仰々しく開く。

ピチャ。

響いたのは水を踏む音だ。

S・A「・・・全く。死んだのは俺じゃなく、お前らになつたな。」

水浸しになつた図書館の一角。

特に酷いのは机の上だ。

インクが滲み、文字が読めなくなつたヴェリテ・ワコンテが散らばつていた。

一部持ち上げてみると、インクはこぼれ落ち、真っ白な新聞になつてしまつた。

S・A「・・・漂白作用まで付いていたとはね。」

しかし、綺麗にするならこのもと重役の役立たずも片付けるべきだつたと、俺は思うね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1364z/>

JETBLACK-Footsteps.Coming.-

2011年12月31日21時49分発行